
非日常同居生活

ザード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

非日常同居生活

【Nコード】

N1572E

【作者名】

ザード

【あらすじ】

俺、荒神浩介。あらかみこうすけ 高2でちよいとケンカ好きな普通の学生。銀髪ぎんぱの髪がトレードマーク。喧嘩は随時受付中！！勉強は、苦手なんです。できれば関わりたくないな。そんな俺はある冬の日、その日常にちよっとした……いや、かなりの変化が生じてしまった。

第一話 「騒がしき日々の幕開け」 (前書き)

空き巣の被害に遭いまして、家の家具がそこそこ盗まれており、しばらくの間生活に不便さが生まれました。高校卒業してから一人暮らしでしたから(泣)犯人はまだ捕まっていないことが、非常に心残りです。しかし、ようやく新しいパソコンが変えましたので、再び更新を再開できます！いい機会なので、これまでの作品を見直し、訂正等を行って再度更新を始めます。少し丁寧(?)になった『非日常同居生活』をお楽しみください！！

第一話 「騒がしき日々開幕」

……ここはどこだ？

……何にも見えない。真つ暗な暗闇だ。ああ、これってアレか。夢の中か。思い出したぞ、午後の授業が暇だったから居眠りしてたんだ。これがいわゆるノンレム睡眠ってやつか。

でも、これってどうやって起きたらいいんだ？夢の中なのはわかったんだが、起きたくても起きられねえぞ。

……つと、なんか声が聞こえてきた。ああ、なんか少しまぶしい光が……これが意識の覚醒の瞬間なのか？

ともあれ、俺の視界に満たされた黒は、徐々に光を帯びて白へと変わっていく

「浩介！早く起きなさい！」

やかましい女の叫び声のおかげで、俺の意識は完全に覚醒する。

視界に満たされた光は、徐々に形となつて現れてきた。目の前に広がるのは、何の変哲もない見慣れた教室の放課後の風景。

……どうやら午後の授業を全部寝てたらしいな。せいぜい今休み時間くらいか？と思つていた自分の馬鹿さにビックリだ、こんなにやるう。

「ほらほら浩介、早くしなよ？今日は浩介のおごりなんだから、ね？美咲ちゃんを楽しみにしてるんだから。ああ、勿論僕もね。」

「ホントよ！さっさと帰る用意しなさい！」

教室の入り口へと目を向けてみると、そこには見慣れたつらが二つ。俺の幼なじみ兼親友の二人だ。

綺麗な黒い長髪を揺らして、偉そうに腕を組んだいる女が清田きよた美咲、先ほどから何かとうるさく叫んでいる女だ。非常に勝気な性格で、それを表しているかのような力強い印象を覚える目、そしてきれいに整つた顔に綺麗な長髪、背もそこそこ高く、男女を問わずに人気がある。これでも昔はかなり控えめの可愛らしい性格だったんだけどな。

そしてその横で柔和な笑顔を浮かべている優男が伏見ふし純じゅん、男というにはきれいすぎる女顔負けの顔立ちだ。金色の短髪で、染めたような不自然さはまるでなく外国人のようにナチュラルな金色。背が一般男子よりも少し低いのだが、そこがまた年上のお姉さま方にうけるらしい。ちなみに顔に似合わず俺と同じでケンカ好き。でも荒っぽい性格というわけではなく、どちらかというとかんなり温和な性格だ。

おっと、自己紹介が遅れたな。俺の名前は荒神あらがみ 浩介こうすけ。喧嘩大好き高校二年生。特徴はこの銀髪くらいなもんだな。身長はそこそこ高め、自分でいうのもなんだが、足は結構長いぞ。普段は純と組んでそこの学校の不良どもと喧嘩三昧な日々を送ってる男だ。

「言っとくけど俺もう金底尽きてきてるからハンバーガー程度で勘弁しろよ。」

ここで俺らの生活状況をば。俺たちは親が家にいないため（俺はいるんだけど）、晩飯は俺たちでじゃんけんで負けたやつがおごるというシステムなのだ。そんなわけだから、大体20時くらいまではいつもこいつらとつるんでる。

「ちよつと、ハンバーガーはないでしょう？私前ラーメンおごらされたんだから！焼肉ぐらいおごりなさいよ！」

なんか半分切れ気味に美咲が怒り始めた。しかし、あきらかにラーメンで焼肉とは割りにあわねえだろ、と心の中でそうつぶやく。

「ふざけんな。んなもん食ってたら、せつかくのご自慢のスタイルに傷が入るぜ。」

と、茶々を入れてみても、美咲は余裕そうに鼻で笑う。

「ふっふっんだ、心配無用よ、そんなこと！そんな一度の食事くらいで太ったりしないからね！」

「塵も積もればなんとやら……」

「あれえ〜？純くん、何か言ってた〜？」

「……なんでもないです。」

弱いな純。もっと面と向かって言ってやれ、じゃないと調子に乗るぞ、こいつは。

まあ、いつまでもこんなところでゆっくりしていても時間の無駄ということ、とりあえずラーメンをおごることに落ち着いで、俺たちは学校を後にした。

「ちよつと、食べ過ぎたかな？」

純の会計、チャーシューラーメン大盛り餃子セット、炒飯大盛り、オレンジジュース、合計1920円。

「いいじゃない、浩介のおごりなんだから」

美咲の会計、激辛ラーメン大盛り×3、叉焼丼、ビール、合計3240円。

「よくねえだろ！てか美咲！未成年がなにアルコール摂取してんだ

「！」

しかしまあ、有り得んほどにしつかりと金は出さされたけどな。これだったら焼肉の食べ放題とかのがよかったかもな……

ラーメン店で飯を食った後、適当に町をぶらぶらと歩いていつものところで解散。家まではここから大体三十分。夜空を見上げると、星一つ見えない暗い空に若干のむなしさを感じる。

「家に着くころは9時だな。まったく、親として子供に家のかぎぐらい渡しとけよ。」

そう愚痴りながら、俺はポケットからピッキングセットを取り出した。……なぜそんなものが入っていった、という突っ込みはなしだ。OK？家庭にはそれぞれの家庭には理解できないもの一つや二つはあるもんだ。

「よし、家が見えてきた……ってあれ、電気がついてるな。家出るときつけっぱなしだったか？」

誰もいない夜道を歩いていくと、俺の家が見えてきた。が、何故

か電気がつきっぱなしだ。すっかり消したと思ってただけだな。もしかして、空き巣か？

「……まあ、とりあえず入っとくか。空き巣程度なら軽くボコせるだろうし。」

というわけで、先ほどのピッキングセットを使い、家の鍵を空けて中へと入ってみる。……なんでそんなことができるんだ、という突っ込みはなしだ、OK？

一応、光のもとに行ってみる。すると、そこには見たこともない俺と同じ年くらいの赤い長髪の少女が床に座っていた。もしかして、これが空き巣か……？

「……だれ？」

しばらく沈黙した後、半分頭の回転がおかしくなりながらたずねた。しかし少女はその問いには答えず、顔を蒼ざめさせながらただ座ったまま後ずさりした。

「あ、あ、あの、わたし、その、この家にきたばかりですから、その、金目のものをいってる場所なんて知らないし……」

どうやら俺を泥棒か何かだと思っているらしい。俺は自分の手元に目をやった。

「あ……」

手にはまだピッキングセットを握ってあった。これじゃあ、確かに俺は泥棒にしか見えないな。

「あゝ待て、誤解だ。俺は泥棒でも強盗でもない。」

「わたし、ほ、ホントに、知らないんです〜!」

まったく聞いちゃいねえ。ちょっとイライラしてきた。

「人の話を聞け!」

つい、大声で怒鳴ってしまった。少女は、

「ひゃう!〜!」

という声（悲鳴?）をあげて硬直した。

「とにかく、いったいあんたはだ……」

近寄りながら質問しようとしていたら、床においてあった枕（なぜここに!?!）につまづき、転んでしまった。

その少女の上から落ち、少女と浩介の唇が重なった。

「……………っ!?!」

いきなりの状況にパニック状況に陥ってしまい、簡単な「のく」という行動を脳は神経に命令することができなかった。

「おや、邪魔だったかな？」

数秒後、不意にリビングの入り口からある男の声が聞こえた。

俺は今のこの状態がまったくよめん。しかし、俺の第六感が告げている。この事件（？）の犯人はこいつだと！

「お・や・じい！」

俺は一瞬で立ち上がり、そのまま親父めがけて鉄拳を振るった。しかし、こともなげにこいつは俺の拳をかわしやがった、畜生。

「しかし、会っていきなりの娘にキスをするとは、驚きだね。自分の感情をストレートにあらわすアメリカ人でもここまでではないと思うよ？」

「黙れ、クソ親父！大体こいつ誰だ！何が理由でここにいったよ！」

絶えず何度も連続で拳を振るっては見るが、全部当たりやしねえ。あ、畜生、むかつく！このクソ親父、返答しだいじゃただじゃおかねえぞ。

「ん、話すと長い時間を必要とするから、とりあえずお茶くん

で。」

俺の拳を交わしながら、事も無げにここから見える台所の棚の中にあるコップを指差しながらそんなことを言う親父。てめえが用意しやがれよ。とか思いつつも、そこで意地を張っても話が進まない。ここは俺が大人の対応をしようじゃないか。仕方なく拳を止めて台所に行き、コップにお茶を注ぎ親父に渡した。

「さて、軽く精神的に落ち着いてきたんで、ちゃんと話してもらおうか。」

「別にいいけど、その手の包丁は置いてきてほしいね。どっちかというときより君の精神状態荒くない？」

手を後ろにして隠していた包丁に気づきやがった。くだらんとこるでまったく鋭い。いや、くだらなくは無いと思うけど。

「まあ、話そうか。その女の子は広瀬 亜衣ちゃん。親戚の子供だったんだけど、まあ、色々合ったことは省くけど、とりあえず両親が交通事故でなくなっちゃってね。」

普段とかわらんテンションで、まるで『今日自転車で転んじゃった。』ってくらいのことを告げるかのように身内の不幸を……って待て待て！テンション軽ッ！軽すぎんだろ！

「で、身内の中で、収入が一番ゆとりのある僕の家が引き取った、というわけなんだよ。」

ちなみにこの親父、むかつくことにとても優秀な人間なのだ。現在35歳だがすでにとある有名な財閥の幹部を務めているぐらいだ。

その地位にたどり着いたのも、たった20歳のときなのだからもつと驚きだ。

なので、この家で金に困ったことは一度も無い。無論貯金だって大量だ。しかし……

「だからって引き取ることも無いだろ。そんな面倒くさいこと、ほかの親戚に任せりゃいいだろ。」

ちよつと冷たいことかもしれないが、俺は心の底からそう思う。まったく知りもしなかった娘の面倒を見るのが至極面倒くさい、という理由もあるが何よりこの家に一般人を置くことに賛成できない。俺が理由で酷い目にあう可能性なんてのはざらなのだ。

てかちよつと待て、親戚が死んだって、そんな話聞いた覚えないぞ？というより、俺は荒神家に居ても親戚が何人居るのか、とかほとんど知らない。せいぜい荒神あらがみ 遙はるかっていう従兄弟とその親が居ることくらいだ。

「君が考えていることももつともだ。確かに君には言っていないかったね、親戚が死んだこと。」

違う！俺の考えていることは実際そこじゃない！確かにそれも気になって入るんだがよ！

「まあ、落ち着きなよ。実際、ほかの親戚に任せなかったのにも、君にとつてはとても意外なことに理由が……」

「なんか、理由があんのか？」

「あつたり無かつたり。」

「いや、どっちだよ」

いいかげんこいつとくだらん漫才をするのもいやなんだよな。さつさと終わらして欲しいのだが……

「亜衣ちゃん、眠そうだから今日はとりあえずその客室の向こうにある部屋のベッドで寝てね。浩介君に自己紹介とかするのは明日でいいから。」

「あ、はい、わかりました。」

顔を赤らめて俺を見ながら言われた部屋へとはいっていく。

まあ、いきなりキスなんかされたら少し警戒のまなざしで見られるか。いや、決してわざとやったわけではないのだが。

「さて、本人がいなくなつたところで、本当の理由を言おうか。」

親父が、珍しく真面目そうな声を出した。顔も、真剣そうな面構えをしている。

「実はね、親戚とかに関する情報に疎い君は知らないと思うけど、あの子の親はね、危険人物だったんだよ。人が苦しむことで快樂を得る、そんな人種。」

そう言うってから、そこからあの亜衣つてことの親父の様々な武勇伝を聞かされた。親父の話によると、あの子の父親はとても酷い男だったようだ。中学で傷害事件を起こしたり、高校でも同じような

ことを何度も繰り返していたらしい。

話を聞いた限りでは、一生涯一度も会いたくないタイプの人種だ。一体どうしてそんな男が結婚できたかが疑問なくらいだった。

「それであの子を引き取るときも、実際は誰も引き取るうとせず、孤児院に出そうとしたんだ。」

「なっ!?!」

誰もあの娘を預かろうともしなかったらしい。実に残酷な話だ。

「そこで、ちょっとそれはかわいそうだから、世界で一番というくらい優しいこの僕が引き取ったのさ!」

「最後の発言が納得いかんがほかの事情はわかった。」

そこまで言うと、親父は不気味な笑みを浮かべた。なんだか、心の底まで見透かしているような、嫌な笑み。

「まあ、どうしても反対するというのはなら孤児院に預けてもいいけどね、君では反対することはできないだろう?」

「っ!」

すべてを見透かすような目で親父は俺を見た。そのとおりだ、俺は反対できない。反対できない理由、それは哀れみの感情なんかではない。反対できない理由は……

「俺も寝る。」

「それは、肯定と受け取っていいのかな？」

「……好きにしろ。」

それだけ言い残して、俺は自分の部屋に戻った。しかし、取れないイライラが原因で、すぐに寝ることはできなかった。

せっかく明日は休みなんだ、寝るのが遅けりゃ遅くまでおきなければいいだろう。

続く

第二話 「明日の空は晴れるかな？」

翌日の朝、前日のことがあったので良い目覚めとはならなかった。だが、毎朝の日課をサボるわけにもいかん。すぐに身体を起こして着替えをすませ、朝食をつくりに一階に降りた。

すると……

「あ、おはようございます。」

一階に下りると、赤い髪の女の子が台所に立っていた。一昨日家に来た広瀬 亜衣だ。どうやら朝食を作っているらしい。

「ああ、おはよ……結構うまく作れるんだな、飯。」

まだ作りかけだが、うまくできていることだけはわかった。

「はい、料理は得意なので……」

そう言いながら顔を赤らめながら目をそらす。やっぱり昨日のことを気にしているのだろうか？ 気にしないほうもおかしいか……

「……親父起こしてくる。」

なんか気まずいので、この場から立ち去ることにした。

「起こしにいったんだからさっさと起きるよ。」

「うう、浩介君、あと五分、あと五分だけ。」

「うつせえ、さっさとおきる！」

親父を起こそうとしただけで、なんで起きるのに10分もかかりやがるんだ。それだけ時間をかけたおかげか、朝食はすでに出来上がっていた。

「朝ごはんはオムレツとサラダか。」

親父はまだ寝ぼけたような面であつらあつらとなりながらテーブルの上に並べられた朝食を見る。

「うまくできてるか、ちょっとわかりませんが……」

メニューはご飯に大き目のオムレツとサラダ。結構うまくできたので、食欲はすぐに湧き食べるのにその時間はかからなかった。

「それじゃ、パパは仕事に言ってくるね。」

「自分のことをパパとか言うな、気色悪い。」

荷物を持って、親父が玄関を出ようとしているところだ。しかし、何で俺は見送りなんかしているのだろうか？あの子は食器の片付けをしているのに。

「そうそう、今日のうちにあの子に街のこととか教えてあげてね。結構この辺道が複雑だから。」

「まあ、ほぼ都心のあたりだからな。」

ここは東京の都心近くの住宅街なので、結構家がたくさん並んでいるため道が要り込んでいたので、道を知らずに歩くとすぐ迷子になってしまうのだ。

「ああ。わかったよ。じゃあ、事故らないようにいけよ。」

「心配してくれてるのかい？浩介君はやさしいね〜。」

「うるせえ！さっさといけ！」

そつとなりながら、親父が家を出るのを見送った。親父の車の音がなるのが聞こえてくると、俺は踵を返してリビングへと向かった。

とりあえず、あの子に街のこととか教えないな。

「あ、浩介さん。食器、洗っておきました。」

「あ、おう。サンキューな。」

とりあえず、リビングにあるコタツの中に足を突っ込んだ。この寒い季節にコタツがあると結構助かる。

「あ、ちょいちょい。こっちきて。」

亜衣にこっちに来るように促す。エプロンはずし、パタパタとこちらに早足でコタツの前に座った。

「……足、いれてもいいぞ?」

コタツが前にあるのに足を突っ込まないので、少し気になった。言われると、亜衣は少し慌てながら足を突っ込む。

「とりあえず、家のこととか街のこととか教えるから、覚えていってくれ。あと、難しいかもしれんが昨日のことはすぐ忘れてくれ。」

「あ、はい……」

少し顔を赤らめながらの返事。

「とりあえず家でのこと。まず、敬語つかうな。」

「え?でも、居候になるわけですし、そんな堂々とするのは……」

礼儀正しい奴だな。いや、普通の人はそうするものなのか？回りが非常識なだけに、常識というものが少しわからない。

「んじゃ、せめて俺には使うな。この家に居れるのは親父のおかげ。俺のおかげじゃない。同じ年齢に敬語使うのもおかしいだろ？」

「そうかもしれませんが……」

これも少し難しいらしい。でも、こっちとしては同じ年齢の子に敬語を使われるのは違和感を感じまくる。

「この事に関しては反論はなし。もう敬語をつかったら駄目。」

「はい、わかり……わかった。」

「それでよし。」

この件に関してはこれにて解決。次は家に関してのことだな。

「この家の決まり(?)は、

- 1、朝食は一日交代で俺とお前が作る。
- 2、風呂は30分以内に出る
- 3、水の無駄遣いはしない
- 4、門限はPM10:00
- 5、ゲームは一日一時間

くらいだな。」

5は、少し(大分?)変に感じるが、まあいいだろう。

「10時まで帰ってこないこともあるの?」

「友達とつるんでそれくらいまでいるのが普通くらいだからな。」

あの親父はああ見えて中々に忙しいので、帰宅するのは結構遅いのだ。純は親が居ないし、美咲の親は長期出張で家にいない。なので、遅くまでつるんでいるのだ。

しかし、そのことを知らない亜衣は、少し怯えるような目で俺を見ながら質問してきた。

「浩介くん、不良なの？」

「喧嘩は好きだが、不良じゃないぞ。」

テストの結果は不良並だが、決して不良というわけではない。服装もしつかりしてるし、授業もたまにしかサボらない。頻度は一週間に10回程度だ。……もちろん、授業を、だぞ？学校を10回も休むわけじゃないからな？いや、そこは普通にわかるか。

ああ、ちなみに俺の通っている学校の制度が少し変わっているの
で、このサボり数はあまり多くは無い。

「じゃあ、次は街についてだな。ところで、お前はどこに通うんだ？
姫織高校が近くにあるけど、そこに行くのか？」

姫織高校とは、この家から約20分でいける女子高だ。

「海斗さんが蒼月学園に通うって言ってたけど。」

「はあ!？」

蒼月学園は、俺の通ってる学校じゃねえか！！あの親父、どこまで俺にこいつの面倒を焼かせるつもりだあ！！

だが、今怒っても仕方ない。親父が帰ってきてからぶん殴ればいい話だ。

「と、とりあえずその学園に俺も通ってるから、学園の説明は後でいいか。」

コタツの上においていたお茶を飲み干すと、俺はスクツ、と立ち上がった。

「んじゃ、街の説明のために、ちょっと外出るぞ。案内とかするから速く用意しろ。」

「あ、うん。」

リビングを出て、玄関に向かった。亜衣が来たのを確認して外に出て、ピッキング用の針金でかぎを閉める。

「んじゃ、いくぞ。」

「うん。」

少し風が冷たい。まったく、今年は「暖冬だ」とかぬかしやがったのはどこのどいつだ。そんなことを考えながら歩き出した。

.....

純や美咲に会わずにすんだらいいな……

家から出てしばらく歩いた。生活上使うことも多いので、まずは商店街へ案内からだな。

「生活で使う品とか、飯の材料とかはここで買う。色々なファストフード店とかラーメン店等、飯屋も多いから、そういうことでも使うぞ。」

「いろんなお店があるね。」

「そりゃ商店街だからな。」

商店街を歩いて、結構使っている店を案内したりして午前の時間を全部使ってしまった。ここほど説明に時間がかかる場所は多分無いので、別にいいと思うが。

「浩介くん、あそこでお昼食べようよ。」

ちょっと前、純や美咲が俺の金で食いまくっていたラーメン店だ。店名は「虎鉄」。ここも結構使う。

平日つるんでいる時だけでなく、休日にみんなで行ったり、一人で行って偶然2人にあったりすることもある。

「……………」

つまり、亜衣と一緒にいるところを2人に見られる危険があるかもしれないわけで……………」

「極力、他のところにしないか？」

「え……………うん、わかった……………」

なんか悲しそうにつぶやく。ああ、なんかもう、こっちが悪いことしたみてえじゃねえか……………」

「……………わかったよ、やっぱりここがいいよ。」

「え、ホント！」

実際のところ、こいつはなんでそんなにラーメン店で昼食を食いたかったんだ？行くっていったんだから、そんなことは後でいいか。

流石に休日の昼間、虎鉄はなかなか繁盛していた。

「結構列できてるな。10分はあるな。場所はとつとくから、迷わない程度にそこら辺の店にでもいってこい。5000円やるから、その範囲内でなんか買ってきてもいいぞ。」

「ふえ、う、五千円も!？」

「お前はきたばかりだから小遣いとかもらってないだろ?やるからいってこいよ。」

「う、うん、わかった。あ、え、ええつと、ありがとう!」

そう言つて、亜衣は近くの店に入った。服屋に入ったようだが、それなら2万円くらい渡してやつたらよかつたかな……

と、そんなことを考えていると、店の中から出てきたメガネの男が話し掛けてきた。

「お、浩介!お前もここで昼済ますのか?」

彼の名は齋藤さいとう 孝昌たかまさだ。孝昌は、短めの黒い髪にメガネをかけた男で、幼馴染ではないが、1年のころにみんなと同じクラスで、2年になってこいつは1組で俺らは10組とクラスが分かれたが、それでもずっとつるんでいる仲だ。放課後は、ナンパに行くことがあるので、たまにつるまず帰ることもあるので、金曜日は一緒に帰らなかった。

「よ、よう。ひ、ひさしぶりだな」

「どしたんだよ、木曜にも一緒につるんでただろ。お久じやないだ

る。」

ちなみに、運動、勉強両方できて、男目からみても結構かっこいいほうなので、女子には結構もてる。ここで厄介なこととして、こいつの知能は半端ない。学年毎回トップを取るほどの知識、そして戦国時代の軍師かかなんかか？と思わせるほどに富んだ知略の数々と洞察力の鋭さ。

もしこいつに亜衣のことがばれたら、あの手この手で俺をいじり倒してくるはずだ。学校でどうなることが、できれば考えたくはない。

「あいつを買い物に行かせておいてよかった……」

「うん、なんだって？」

「いや、なんでもねえ!!」

「なぐにやっつてんだ、お前。今日のお前、結構変だぜ。あゝ、おもしろ。じゃな!」

はっはっは、と笑いながらどうにか去ってくれた。あいつが帰った後、すぐに亜衣が帰ってきたので、本当に危機一髪だった。

「さて、飯も食ったしそろそろ行くか。」

商店街をでて、後は近くの普段バイトしている喫茶店、公園、河原を案内した。全部俺たちがつるんでいるところだが、それ以外案内する場所を思いつかなかった。

都心近くに綺麗な河原があるのは結構珍しいので、和むには結構いい場所だ。

「さて、一通り案内は終わったな。今日は晩飯でも作るか。晩飯は俺が作るけど、なにがいい？」

「……作れるの？」

疑ってやがるな、小娘め。親父と二人暮らしの息子を甘く見るなよ、小学生のころから自分で一般的によく食べるものは作れるようになってる。

「分、どんなものでも作れる自信だつてあるさ。さあ、言ってみろ。」

「えっと、それじゃあ、カレー！！！」

「案外メジャーなもの要求してきたな。」

「浩介くんがカレー作れるかも不安だけど。」

「言ったな。お前の普段作っていたものよりうまく作ってやらあ。」

家につき、すぐにカレーを作り上げた。煮込む時間が少なかったが、その割にはまあまあなできた。

「ん、おいしいー！」

「言ったる。それぐらい作れるって。」

しかし、おいしいと言ってるわりには、少し悲しそうにしている。ニンジンが食べれないのか？いや、これはカレーのお決まり具材だから、注文してきた奴に限ってそれは無いだろう。

「私より、うまく作れてる気がする……」

そんなことが。

「男は仕事、女は家事って時代はもう終わったんだよ。」

「でも……やっぱり、女としては悔しいよ。結構得意だったのに。」

「残念だったな。小1から朝晩作ってたキャリアにはそう簡単にならんさ。」

食事を終え、皿を片付けコタツに足を突っ込みテレビを見るそれにつられてか、亜衣もコタツに足をいれ、同じくテレビを見る。

「……」

二人でいるのに、黙々とテレビを見てるのもなんか変だな。あつちも何かを意識してか、テレビではお笑い番組をしているのに亜衣も笑わない。芸人さん、ホントごめん……。

「そついやさ。」

長い沈黙を破るために、俺が口を開いた。

「え?」

「お前、服屋から出てきたけど何もかってなかったな。」

服屋から出てきた時、亜衣は手ぶらだったのだ。

「お金が足りなくて……」

「悪い、2万ぐらい渡してた方がやっぱりよかったな。」

「え、そんなにお金にゆとりがあるの!??」

「親父が結構稼いでるからな。小遣いはざっと20万はあるぞ。」

「え!??」

一般人が聞いたら驚くだろうな。これを一ヶ月であいつらとつるんで全部使つと聞いたら、もっと驚くだろう。

実際のところ、これを俺、純、美咲、孝昌で5万ずつに分けてもらうため、すぐに使えるが。ちなみにこれは、俺の生活費全般も含まれているので、割と貧乏な生活にも近い気もしてくるけどな。

「お前も親父からもらえるんじゃないか？」

「すごい家だね……」

暇つぶしにバイトをしているが、実際している意味は無いだろう。ちなみにバイトはこいつを案内した喫茶店で月、水、金でみんなで行っている。

前の金曜のようにたまに休みになることもあるが。

「さて、そろそろ遅いし寝るか。明日から学校だから、お前も夜更かしするなよ？」

「浩介くんはしないの？」

「お前に色々教えないといけないから、しっかり睡眠をとっておくんだ。」

そういつて二階へ上がり、自分の部屋に入りベットにもぐった。金持ちと入っても、ほとんど貯金しているため、家は割りと普通だ。

玄関から入ると、左に親父の部屋、右に風呂があり、もう少し進むと左に階段、右に便所があり、そのままおくに行くとりビング、台所がある。

リビングから客室につながっていて、親父が人呼んだときとかに

使う。昨日、一昨日は亜衣が寝てたな。

二階には俺の部屋と、今日から亜衣の部屋になった部屋があるくらい。一階の客室は少し一般家庭には無いか。

部屋も、普通の家とさほど変わらない。何坪とか詳しく知らないけど。

なお、現在の亜衣の部屋はもともと母さんの部屋だったのだが、もう死んでいるので亜衣の部屋にしたというわけだ。

「明日から、忙しくなるな。」

亜衣が上がってくる足音が聞こえた。二階に上がるのはほとんど俺だけだったので、とても違和感を感じた。

まあ、すぐに慣れるんだろう。

今日は悩むことも特になく、すぐに寝ることができた。でもまともな喧嘩、これからできるかな、とかは考えてたけどな。

続く

第三話 「テリブルスクール」(前書き)

友達の家で、友人のDVDに編集されていたアメトーークの「
ジヨジヨの奇妙な芸人」を見て以来、作者はジヨジヨが大好きです。
好きなのはそりやもう確実です。コーラを飲んだらゲップが出るく
らい確実です。

第三話 「テリブルスクール」

昨日は日曜だったが結局忙しい一日となり、結局俺はゆっくりとすることができなかった。

そんな疲れを感じながらも、今日も今日とで俺は目覚ましの音を効き目を覚ます。

「今日は平日か……とうとう待ちに待たない学校の日だな……」

愚痴りながらすぐに着替えを済まし、一階に降りて簡単な朝食を作ることにした。

若干約一名この家の住民が増えたが、たった一人前増やすことくらいいけない。ハムエッグとトーストを作り、皿に並べ、コーヒーを入れ、朝食の用意が完了だ。と、ここで俺はフライパンとお玉をもって二つをぶつけまくった。気が狂ったわけじゃないぞ、こうしないといけないんだ。

「起きろ!!!朝だぞ!!!」

なんか漫画のような起こし方だが、親父はこれじゃないとすぐには起きない。平日は出勤が早めなのだ。

「浩介君、もっと静かにはできないかな?」

不機嫌そうに親父は台所にやってきた。ならさっさと一人で起きろよ。

「何十分も起こすのに時間はかけれないからな。さつさと座って食え。」

早起きさせても用意が遅いんじゃない意味がない。さつさと親父を席につかせると、俺は親父のシャツにアイロンを欠け始める。

そして親父が席について朝食のトーストをかじり始めるとほぼ同時に、亜衣も二階から降りてきた。

「浩介くん、おはよ……さっきの音、何？」

「気にすんな。毎朝行ってるから、しばらくすれりゃ慣れる。」

亜衣も席に座り、朝食を食べ始める。俺もさつさと親父のシャツにアイロンをかけ終え、エプロンはずし席に座り朝食を食べ始めた。

朝食も食べ終わり、玄関で亜衣が仕度を終えるまで待った。どんな不測事態が発生するかわからないので、いつもより10分早めに出れるようにした。7時には亜衣が用意を終え、俺たちは玄関にて靴をはき外へ出る準備をする。

「親父、鍵閉め忘れんなよ！」

「い、行ってきます。」

「は〜い、二人とも、気をつけてね〜。」

玄関を出て、普段どおりの道を歩こうか、知り合いのあまり通らない道を通ろうかで迷ったが、今日は普段より早めに出たので知り合いとは遭遇しないだろうと考え、普通の道を歩くことにした。

蒼月学園までは早足で30分はかかるが、道を知らない奴もいるのに早足で行くのはちょっと気が引けたので普通の歩行速度で向かった。

まあ、普通に歩いてても50分でいける。学園へは8時までに行けばいいので、ほぼ100%遅刻は無いだろう。

なんやかんやで、つくまでに55分はかかったが結果オーライだ。辺りに知り合いはいない。

「んじゃ、職員室はあそこだから。そろそろ遅刻になりそうだから

俺はもう行くぞ。」

半ば突き放すように背中を押しやって、俺は下駄箱へと向かった。誰にも見つかっていませんように、と祈りながら

「浩介、下で一緒にいた子、誰？」

純に見つかっていた。迂闊だった。そりゃそうだよな、教室は2階だから校庭がしつかり見渡せるもんな。

「……なあ、純。今から早退するのとコンマ1mmの疑問ももたずにこのまま学校生活を続けるの、どっちがいい？」

「OK、聞くなってことね。美咲ちゃんとかは気づいてないから、秘密にしておいてあげるよ。でも、よっぽど大事なことだったら後でちゃんと話してよ？」

キーン、コーン、カーン、コーン。チャイムが鳴った。

「んじゃ、また後ほど。」

純も席に戻った。

俺の席は窓際の列の前から2番目で、純は廊下側の窓の列の前から3番目で、結構席が離れている。ついでに、美咲の席は俺の隣の列の前から3番目、つまり俺の斜め後ろだ。

都合よくさっきの会話の時は美咲はいなかったようだ。

(流石に亜衣と同じクラスにはならないよな。10クラスあるんだから、同じクラスになる確率は10%、多分違うクラスになるだろう。)

「何ぶつぶつ言ってるの？」

美咲の耳に俺のぼやきが聞こえたようだ。

「なんだ、お前見えないのか？ほら、ここにいる妖精。」

「ごまかすならもつとまともな言い訳をしなさいよ。答えられないなら答えられないでいいんだからさ。」

あきれたように言い放つ。まあ、呆れるわな。

「おゝす、みんな、朝の時間だ!!」

口にタバコをくわえた学生っぽい奴が教室に入ってきた。目は前髪で軽く覆われていて、目つきが見づらい。

あいつは決して不良生徒ではない。このクラスの担任、伊藤樹

だ。教室で堂々とタバコを吸う、クビ寸前の教師だ。

しかし、生徒から人気があるためクビになってないのだ。

「よし、さっそくだが緊急ニュースだ野郎ども！聞いて驚け！今日は転校生が来るぞ！可愛らしい女の子だ！」

「ブツ！！」

吹き出してしまった。

まさかな、まさかとは思うけど違うよな？あれだよな？赤っぼい髪の毛の女の子じゃないよな？別人だよな？亜衣じゃないよな？神様俺のこと愛してくれてるよな！？

頼みます、別人であってください、別人だったら今日神社に1万円御賽銭しますから！！

わ〜！という大きな歓声の中、俺は机に突っ伏して祈るように手を汗握る。

「おいこら、野郎ども！ひとまず、落ち着け！好みのタイプだったら後で告れ！！いいか！？」

「「「YES！！」」」

クラスの野郎どもはのりのりだ。でも俺はのりに乗ってる場合じゃない！

もし別人だったら不細工でも告ってやる、だから別人であってく

れ、広瀬亜衣じゃないといってくれ！

「よし、んじゃ、広瀬 亜衣さん、ご入場。」

.....

はっはっは、もうどうにでもなれ、もう俺の人生の約半分は終わった……終わるには早い気がするが、もうそんなもんは知ったことか……

「……くっくっく、フッフハハハハハ！」

俺は、無意識のうちに小声で笑い声を上げていた。隣の席の奴と美咲は俺の精神崩壊（？）に気づいたようだが、怖くて話し掛けれなかったらしい。

（ねえ、浩介、あの子って校庭で浩介と一緒にいた子だよな？）

純からのアイコンタクトが届いた。

（ああ、そうさ、そうとも、この俺を哀れな患者へと変えた魔界からの使者だよ。）

（頭大丈夫？）

むかつく返事が来た。まあ、そう思われても仕方あるまい。

「んじゃ、広瀬さん、自己紹介よろしく。」

「え、えっと、はじめまして、広瀬 亜衣です。えっと、こ、これ

からよろしくお願いします。」

かなり緊張しているらしい。だがそのおかげで俺にもまだ気づいていない。ここで気づかれたらなんかやばい展開になりそうなので、顔を伏せておく。

「んじゃ、席は清田の後ろが空いてるな。そこでいいだろ。」

美咲が立って手招きしてる。このままばれずにいけば、どうにか休み時間にも騒ぎを立てないように亜衣に忠告できる。

さあ、何事もなく俺の横を通り過ぎていくがいい！

「あ、浩介くん!!」

神様はそこまで私が嫌いですか……いや、普通銀髪は目立つからな。ちゃんと髪黒く染めてきたらよかったよ……

「ん、なんだ荒神、知り合いか？」

やばい、本格的にやばい。樹がなんか「久々にいじる面白いネタ見つけたぜ。」って顔をしていやがる！だめだ、こいつにエサを与えたら後でどれだけいじられるかわかったもんじゃない！

「もしかして、荒神って広瀬さんと知り合いなのか？」

「そんなレベルじゃないだろ、呼び方が「浩介くん」だぜ？すでに親しい仲と見た。」

「今日転校してきた子を口説くとは、流石は荒神。」

そこらでばそばとそんな会話が聞こえてきた。そろそろ精神的にもマジやばい、限界点突破寸前だ。

「おい、荒神、先生に言ってみる？ とういう仲なんだ？」

「……腹痛いんで保健室行ってきます！！」

すぐ横の窓を開け、この教室から飛び降りた。たかが二階、俺から言わせりゃ飛び降りるくらい、わけない！

「あ！あの野郎、逃げやがったぞ！」

教室内からクラスメイト達の大声が響く。

「伏見！教師命令だ、奴を追え！」

「へあ！？りよ、了解！！」

純も追ってきた。あいつも俺と同じくらい身体能力が高い。あいつもまた飛び降りるくらい、わけないだろう。厄介だな、パワーは俺のほうがあるんだが、スピードに関しては純はとにかくすごい。50m走のタイムは6秒フラット、スピードはかなり上級レベルだ。あ、ちなみに俺は6秒4だ。まあまあつてくらいか？

（だがまあ、やり方しだいだな。純一人だけなら、どうにかすれば撒けるかも……）

と甘い考えを抱いていると、不意にもう一つ新たな影を俺の目が捉えた。

「待てい、浩介!!」

ここでさらに一組の窓からも女好きの代名詞、先日で遭ったあの斎藤 孝昌が窓から飛び降りてきた。もしかして一番クラスのはなれた10組の会話が聞こえたのか？

「浩介、この陸上の全国大会で1000m1位の俺から逃げられると思っただか!？」

すぐに俺の前に回りこまれた。後ろからは純がやってきて、現在はさみうちにされてる状態。

どうする、俺!?!どうする!?!どうすればいい!?!ああ、駄目だ、うまく頭が回らない!?!こうなったら、強行突破だ!!

回れ右をすると、俺は純のいる方へと走った。

「強行突破はさせないよ!!」

純は戦闘体勢を整えた。残念だったな、俺は戦闘はせんさ。

「力づくではいかねえよ!!」

右から純をぬこうとする。それに気づき、純はそちらの道をふさごうとする。

「はっはっはっ!引っ掛かったな、フェイントだ!」

右足を軸にしてクルツ、と一回転して大きく開かれた左側をすば

やく通り去っていった。

「待て！浩介！」

後ろからハイスピードで孝昌が追ってきた。怖いのはこいつだ。孝昌は俺よりも純よりもかなり足がはやい。

「俺から逃げられると思ったか!？」

俺との距離が約10mになった辺り。そこで俺はバツと振り返り、孝昌めがけてスライディング。

「うおおー!!」

孝昌も勢いが激しかったので、急に止まれなかったのだろう。スライディングを喰らい、転んでしまった。

「残念だったな!!俺の勝ちだ!!」

そのまま俺はすぐに立ち上がって走り、校舎へと戻った。校庭からはだいぶ距離をおいて二人が追いかけてきている。が、そんなもんは校舎で巻けるだろう。

校舎内

ひとまずクラス前を通ってみた。ある程度事態が収まっていたらとりあえず言い訳をして済まそうと思っていた。

しかし……

「よし、野郎ども！こうなったらあの二人と協力して、何が何でも荒神を探し出すぞ！行くぞ！」

「おう！！」

教師が普通そんな行動を煽りますか！？てかお前らも乗るなよ！野郎どもって言いながら女子もやる気満々だしよ！

「あ、いたぞ！荒神だ！」

「囲め、囲めえ！」

速っ！なんだ、こんな時だけ発揮される無駄な統率力は！！担任の樹を中心に、奴らは完全に俺を捕まえる気でいやがる。

「ふん、これだけの人数は倒せないだろう、荒神！流石のお前にも策はないだろ！観念するんだな！」

自信たっぷり樹が高笑いをしている。ふん、だが残念だったな。

「たった一つだけ策はある！」

「な、なんだと！」

俺が人差し指を立ててそう高らかに宣言すると、流石の樹も驚いているようだ。

「いいか、息が止まるまでとことんやるぜ！」

「息が止まるまでだと！？どついうことだッ！」

「フフフフフ……」

俺は敵を見下すように見回す。そして、とある一点を見つけて狙いを定めると、そつちを向いて一言叫ぶ。

「逃げるんだよオオオ……」

こうなりゃHRの時間まで校舎内を逃げ続けてやる！

続く

第四話 「パニックスクール」

そのまま逃げ続けて、現在は屋上のタンクの陰に隠れている。しかし、よく考えれば屋上とはもっとも見つかりやすい場所じゃないだろうか？ここに来る人間は昼休み、授業中間わず大勢いるのだから。

「この校長は、「青春第一」をモットーにこの学校の制度を作つてやがる。この学校は、勉強できれば多少授業をサボってもあまり怒られない。」

校長はそういうところに青春を感じているようだが、やっぱりいけない、といわれたことをするからこそ青春みたいなんじゃないのか？

まあ、今はそんなことはどうでもいいか……

「ここじゃないのか!？」

俺のクラスの生徒が一人入ってきた。

「ぶっ!」

さらに、その後ろに2、6、7組の生徒までが数名現れた。なんだ、これ、学校全体の人間を使ったかくれんぼなのか!?俺以外鬼なのか!?

「いま「ブツ!」吹き出した声が聞こえたぞ!」

まずい、気づかれかけてる！

「多分タンクの裏だぞ！！」

マジヤバい！このままじゃばれる！だが、敵は4人、俺ならどうにかできる！

「そこかあ、荒神！」

「秘技、みぞおちクラッシュャー！！」

タンクの裏を覗き込んでた奴のみぞおちめがけてスーパーパンチ！喰らった奴は、その威力でその場に倒れた。俺を探そうとするからそうなるだよ、同情の余地はねえ。

「って、一人やってもどうにもならないんだよな。なら、いっそ、ここから飛び降りてやる！」

俺はそこから校庭めがけて走り、この屋上から校庭めがけて飛んだ。

「うわあ、荒神の奴が自殺を！」

残念、そんなことはしません。

校庭の校舎側のほうには、一本とても大きな木が立っている。その枝をつかみながら降りる。枝は衝撃で折れるが、その時に落ちるまでの衝撃は半減され、着地の瞬間にタイミングよくしゃがむことによって衝撃を完全に殺し、着地した。

「悔しかったらここまでおいでってな！」

この学校は5階建てなので、屋上から校庭に出る時間はいうまでもなく長い。そのまま俺はクラスのいつぱいあるこの中央棟ではなく、購買部、文系の部活の部室がある東棟へ逃げ込んだ。

とりあえず長期戦になりそうなので、昼飯は今のうちにかうことにした。購買部までは魔の手がおりてないらしい。

校長の「青春第一」的考えで、サボリのためにこの購買部は放課後まで無休で運営されている。こういうときには結構助かる。普通、こんな事態は起きないが。

「すみません、あんばん5個お願いします。」

長期戦といったら、やはりアンパンだろう。警察だって使ってるんだ。

ん？でも待て、しかし警察が張り込み捜査をする時にアンパン持っているからこれをチョイスしたが、アンパンってそんなに腹が膨れるか？

そんなことを考えながら購買部を後にする……予定だった。

「隙あり、荒神浩介！」

純がリベンジにやってきた。流石は幼馴染、そして親友だ。俺の行動パターンは読めていたらしい。

「しつこいぞ！！お前だけは俺の味方だと思っていたのに！！」

「いや、浩介を捕まえたら5000円って聞いたら断るに断れなくて」

樹の野郎、教師が生徒にそんなもん渡そうとしてどうする！あんたいずれこの学校でもクビになるぞ！

……ん？しかし、なぜだろう？顔は完全に笑っている表情なのが、俺には純が少し怒っているように見えて仕方がないのだが……

「ここで争ったら購買部に被害が出る。表に出ようぜ。」

そういつて純に表に出るように促す。俺がそのままついてくると思ったのだろう、純は言われた通り表に出ようとした。

「そつちじゃねえよ、こつちだよ！」

俺は純が購買部を出ようとした瞬間、窓から脱出した。馬鹿め、ここは一階だ、窓から逃げるくらいじゃない。

「じゃ〜な〜！〜！」

そのまま俺は逃げ去っていった。次はどこに逃げようか、と考える前に少しいやな予感がした。

「待てよ、亜衣って教室にいるんだよな？もしかしたらあいつ、誰かに質問されら、俺の家に居候してるって答えてしまっくんじゃ……」

凄く不安になってきた。ひとまず教室に戻って亜衣を連れて行かないと……！

教室に行ったところ、すでに誰もいなかった。亜衣もどこかに移動したのだろう。

「みんなから逃げつつ、亜衣の奪還か……疲れそう。」

ちょうど昼休みのチャイムが鳴った。

あいつらが昼食食べてる間に、亜衣を奪還できればいいな。そう切に願う。ともあれ、どこの教室にも亜衣はいなかったので、次は学食堂に行くことにした。多分美味あたりが食堂にでも連れて下ろうしな。

「到着！！」

誰にも見つからずに学食までたどり着いた。結構ここにくるまでも心臓がバクバクしていた。

「久しぶりにメタル ア・ソリッド、やってみようかな……」

この感覚は、もはやゲームだけにとどめてほしいものだ。

何はともあれ、せつかくばれずに到着したのだ。さっさと用事を済ませよう。というわけで学食堂の中をのぞいてみた。普通、この日本に赤い髪の女の子なんて普通いないから、即行で見つけられた。

「ゲツ……」

隣には、美咲、純、そして孝昌が座っていた。純と孝昌の奴ら、作戦変更しやがったな。この学校で、俺の知っている限りもつともやりづらい相手がそろいやがったぜ。

「どうやって亜衣に近づこうか……あの3人の目を盗んで進むことはおそらく無理だぞ……」

亜衣と話しながらも、3人ともあたりをきよるきよると見回している。なるほど、亜衣を餌として俺をおびき出そうとしているわけだ。なら、俺にも考えがあるぞ。

「アンパンはこう使うもんじゃないんだが……」

購買部でかっしておいたアンパンをひとつ、美咲の顔めがけて投げ飛ばした。他2人に投げても多分かわされるかキャッチされるだろうから。

「痛っ!!なに〜!?!」

美咲は自分の顔に当たったアンパンを拾い上げる。これには、俺がちよつと紙を貼り付けておいた。挑戦状、とでも言うべきものを。

「なになに、「美咲、純、孝昌。おまえらじゃあ、絶対に俺を捕まえることはできん。だから、そんなお前らにチャンスをやるう。屋上に一人でいてやるから、さっさと来い。まあ、お前らじゃあそこまでしてやつても無理かもしれないけどな。ププツ(、(、(」だつて。うわあ!!なに、馬鹿にしてんの、あいつ!!」

美咲は結構キレてるっばい。にしてもあんな挑発程度でキレるとは、ホントにたいしたことのない器だな。

「あんたたちは、これ見てキレないの!？」

「キレてないですよ。」

「俺をキレさせたらたいしたもんだ。」

純と孝昌は、そろって長州小力のマネをしている（あんま似てない）。ふう、あいつらがああいうことする奴らだとは、正直思わなかった。つつか、古っ！

「ああ、もういい！私一人で行ってくる！浩介のくせに手紙に顔文字なんか使ってるじゃないわよ！」

ああ、キレるところはそこですか……

それはなにか、俺は顔文字は使っちゃあ、いかんのか？まあいい、一人は退けた。次に純の性格だと、美咲に仕方なくついていってやると思っただが……

「仕方ない、僕もいつてくるよ。孝昌、見張りよろしく。」

予想通り、純も席を立った。問題はここからだ。

「さて、孝昌をどう退けるか……おれもここにどどまりっぱなしはまずいんだが……」

ほぼ学校全体で俺を搜索しているので、同じところにとどまりっぱなしだと、バレるかもしれない。できればさっさと動きたいんだがな。そう考えていると、俺の予想に反して孝昌がふいに席を立った。

「なんだ、便所か？」

なんだか知らんがラッキーだ。こうなったら、多少の人数にばれることは、もうどうでもいい。孝昌のほうの数倍厄介だからな。一気に亜衣をつれて逃げるぜ。

「うおおおおー!!」

必死に走り、亜衣のところまでたどり着いた。

「ゼエ、ゼエ、亜衣、ちょっと逃げるからついて来い！」

「え、ええ!？」

亜衣は少し戸惑っているようだが、もはや知ったことか。数名、俺に気づき、捕まえようとしている奴らが俺の周りを囲んだ。

「荒神!?!さあ、おとなしく俺の小遣いになってもらうぞ!?!」

「いいや、俺の小遣いになってもらう!?!」

どいつもこいつも樹の野郎に買収されているらしいな。てか、なんだか全員俺の知ってる面だ。速い話が友達のはずのやつら。

……ふう。今日、俺は家に帰ったら友情というものについてゆっ

くりと考えることにしよう。

「ともあれ一人ほどノックアウトしてもらおうぞ！」

亜衣のすぐ近くにいた男に、秘技みぞおちクラッシュヤーをかます。そこにできた穴をつき、亜衣の手を引いて即座に逃げ出した。

「わあああ、浩介くん、転んじゃうー!!」

くそ！何気にこの女、トロいな！

「じゃあ、落ちねえように気をつけるー!!」

転ばれたらたまったものではないので、亜衣を背中におんぶをして走ることにした。

「え、ちょっと、わわわわわわー!!」

「だあ、騒ぐなー!!落ちるぞー!!」

亜衣を背負ったまま、階段を二段飛ばしで上っていく。衝撃がきついだろつが、そこら辺は我慢してもらおうほかない。

「屋上まで逃げるぞー!!舌かまないようにしてるー!!」

「ううー、こんな学校生活やだ。」

俺だって嫌だ、こんなの。とりあえず亜衣の愚痴はほおっついておいて、とにかく屋上へ向かった。ここ西棟の屋上は、中央棟の屋上へとつながっているの、そこを利用して逃げることにした。

「やべ、こいつ呼んでたの忘れてた。」

屋上へと上つてみたら、先ほど挑戦状をたたきつけた相手、美咲と純がいた。しかも、やつかいなことになぜか孝昌までもが一緒に。

「孝昌、何でお前までここに？便所じゃなかったのか？」

「残念だったな、お前の行動は読めてるから。先回りしといたつうわけよ。」

孝昌の頭によさには普段テスト前に頼っているが、今はうざくてたまんない。その横で不機嫌そうな美咲は、先ほどのアレをまだ根に持っているようだ。

「さあ、浩介。そろそろ降参したらどうだい？」

「わるいな、純。俺はお前の小遣いになる気はない。」

とりあえず強気な発言をしいたけど、亜衣を背負った状態では

逃げにくい。美咲はどうでもいいが、また純と孝昌がコンビを組みやがった。

「仕方ない！亜衣、気を失うかもしれないから目をつぶってる！」
「え！ええ！！えええ！！！」

反論しようとした亜衣だが、そんな間はもちろんない。

「ええ、わっ、キヤアアアア！！」

前の時と同様、屋上から飛び降りた。まあ、流石にこれをしたことない人間にとっては恐怖でしかないか。

「キヤアアアアア！まだ死にたくないよお~~~~~！」

「死なないから安心しろ。」

ここもまた前回同様、木の枝を折りながら着地し、タイミングよく足を曲げることで衝撃を殺した。でも、こればかりしているとそろそろ自然破壊で校長にしかられそうだな……

「浩介~~~~！！逃げるなあ！！！」

あいつらにはこれができない。まあ、俺も偶然屋上から落ちてしまった時、無我夢中で習得したこの飛び降り方だが、流石にあんなことがなければ俺もこんなことはしてないんだ。

ちなみに、屋上から落ちそうになったのは美咲の悪ふざけが原因というのは内緒のお話だ。

「ふう、どうにか逃げれたな。」

そんなことをいっていられたのも、その時だけだった。

「はっはっは！残念だったな、荒神！お前はすでに包囲されている！」

その声に驚き周りを見れば、あのアホ教師樹と、俺の周りを取り囲む大勢の蒼月学園の生徒たち。ああ、喧嘩して有名になってなければ、ここまで大勢に囲まれることはなかったんだろうな……

「今回は逃げる隙間なんぞねえぜ！それに全員ナ スの科学の力で開発された紫外線照射機をつんでいるからな！ナチ の科学は世界一イイー……！！」

嘘つけや！

「さあ、素直に体育館に連行されるんだな、ハッハッハ！！」

おい、教室じゃなくてなんで体育館なんだよ！なんか、無茶苦茶いやな予感がするぞ……

続く

第五話 「エスケープスクール」

えっと、今の俺の状態がよくわからなくなってきた。ひとまず整理してみよう。

えっと、亜衣が俺のクラスに編入されて、そこで俺となんらかの関係があることがバレて、俺vs学校のかくれんぼが始まって、逃げてたけど樹につかまっただんだよな。そして、現在にいたる、かあ

……

……なんなんだ、この状況は？

「これより、被告人「荒神浩介」の取り締まり+裁判を行う。」

体育館は、すでに裁判所のように姿を変えていた。俺は、裁判で被告人が立っているところに立たされている。樹は、裁判官が座っている位置に座っていた。しかも、俺は手を手錠で拘束されている。逃がさないためだろう。

「ちょっと待て、樹。このセットはなんだ？」

「見てわからんか？こんなことが起こった時のためにひとつきごとに学校の経費で買い集めた裁判セットだ。若干百数万はしたな。」

こいつ、学校の経費をなんだと思ってやがるんだ？この事態には流石の校長も驚いているぞ。

「伊藤先生。まさか学校の経費をこんなことに使っていようとは……若いうちからこんなことを……この学校でなければ、クビどころ

の問題ではありませんよ。」

「はっはっは！この学校だからやったのですよ！当然じゃないですか！」

この野郎は……

校長も校長で、そんな甘っちょろいことを言っとらず、こんな奴は早くクビにすりゃいいのに……

「え、それでは、まず被告人「荒神浩介」と広瀬亜衣の関係を白してもらいたいと思う。荒神、どうだ？素直に吐けば、もれなくこのカツ丼を食わせてやるぞ。」

「ほう、カツ丼か……だが断る！」

答えてやる義理もないね。つか、カツ丼で釣れるとか思うなよ、この馬鹿。俺はどれだけ軽いんだ、おい。

「残念だが、荒神！！お前に黙秘権はない！！！」

裁判の警察がいる席（正式な名前を俺は知らん）には、多数の生徒がいる。見える範囲では、俺のいる10組、5組、4組、1組のほぼ全員いた。

「素直に吐かない場合は……どうなるだろうな？ああ、色々やばい事態が起こることが頭に浮かんでくる……」

こういう何するかは、ちゃんと言ってくれないと余計に不安になってたまらん。だめだ、自首してしまいそうだ……だが、ここでく

じけたら駄目だ、今後の俺の生活の平和のためにも！

「ほう、俺を脅すとは、たいした度胸だな……あとで覚えてろよ？」

一応脅してきた奴にはガン飛ばしておいた。少しはびびったっぽい。なんだ弱いな、おい。さっきビビった俺はなんなんだ。

「しかたない。それでは証言者が数名いるから、ちょっとよろしく。」

この体育館へと、2人の男が入ってきた。

「俺が昨日ラーメン屋の虎鉄から帰ろうとした時、浩介にあったんだが、その時いやに浩介はきよどっていたんだ。多分そのときから何か関係があったと思うんだ。」

そこにたっている男の一人は、孝昌だった。手にはしっかり5000円を握っている。

「いや、ここしばらく浩介君が女の子を家に連れてきていてるようでした……もしかしたら、その子を連れてきていたのかもしれない。」

そして、証言をしているもう一人の男は……

「って親父！何でここにいやがる！」

「いや、浩介君が非行に走っていないかと心配だったしね？」

なんと神出鬼没の男だ。学校に普通きますか？てか……

「それより仕事はどうした？」

「サボってきたに決まってるじゃん わかりきったことなんだから聞くまでもないでしょ……て、ゲフンツ！」

アンパンが、まだ1個残っててよかったぜ……

「アンパンっていつても、顔面あたると結構きくもんだな。」

しかし、アンパン1個顔に当てられたくらいでダウンする人間は見たことなかったけどな。

「とりあえず証言者の話から推測すると、荒神と広瀬の関係は休日辺りから発覚したようだ。しかも家に連れてくるとは、なかなかやるな、少年。」

「うるさい、黙れ、息をするなカス教師。」

「いきなり酷くねえか、おい！」

お前の作った今の状況のが酷いわ、ボケ。

「という事らしいが弁護士、なにか弁護することはあるか？」

え、俺を弁護してくれる人いたの？

ふと見てみると、純と美咲の二人が弁護人のイスに座っている。ああ、やっぱり持つべきものは友だ。孝昌はもう友達じゃない。

「その話だと、本当に広瀬さんと浩介が繋がっているとは証言できないと思います。裁判長の判断は推測の域を出していません。」

ああ、やっぱり純はいいやつだ。真剣に俺のことを弁護してくれてる。って、ちょっと待て。じゃあ何でお前まで俺を捕まえようとしてたんだ？

「というか、僕らは弁護人に選ばれたのに被告人と話す暇ももらってません。できれば、少し話す時間をいただけませんか？これって正当な要求ですよな？」

ニツコリとした笑顔で裁判官こと樹に尋問を要求する純。にしてもさつきから美咲のほうはまるでやる気なさそうだな。おい美咲、形式上でもそこにいるんなら手鏡見ながら髪を整えんな、馬鹿！

だが、樹がこの要求を素直にのむとは思えん。さあ樹、如何にしてかわすつもりだ。

「……だが断るッ！」

職権乱用か！卑怯な手段に出たな樹！

「しかし樹先生、このままでは埒があかないですし……」

「いやだがな、俺だって先に回答知る奴がいたらむかつくじゃん？ほら、自分はコード アスR2見てないのに他の奴が見てたらむかつくじゃん？そついう気持ちと似てると思うんだが……」

「ごちゃごちゃと、途中から趣旨の変わりつつある話し合いを進めていく樹と純。ギャラリーはたまに二人の言うことに「確かに……」

とか「あゝ、その気持ちわかるわ！」などと頷いたりしている。

……もう開放してくんないかな？もはや話し合いに俺の名前なんざ出てねえじゃねえか。と言っても開放してくれるわけではないか。んじゃ、勝手に抜け出すとしましょうか。

「……イッ！……よし。」

あまり回りに聞こえないように極力声を押さえ、音を出さないようにして関節を外す。そしてそのまま慎重に手、指を抜いていく。

「……オツケ、成功。」

バレないように関節をはめ直し、手錠を外すことに成功した。ここまでくれば、回りも油断してるしどうにかして強行突破で出口から抜け出せるかも。

(……いや、ありゃ無理だな。)

回りを改めて見回してみると、唯一の出口である扉は警察側の席のあるところ、そこには証人だからだろう、孝昌が立ちふさがっていた。

あいつがいたら、どうやっても逃げ切るのは無理だ。すぐに捕まっちゃう。

(畜生！どっか行きやがれ、この馬鹿！)

意味はないとわかってはいるのだが、とりあえずむかつくので孝昌に向かってギロリと睨む。俺と目が合った孝昌は、ニヤリと笑み

を浮かべた後に俺の眼光を柳のように流すように悠然と顔をそむけた。

(……余計にうぜえ。)

このまま睨み続けててもなんか不毛だし、そろそろやめておくかともあれ、俺が自白しなきゃいいんだ。樹のたまにかけてくるプレッシャーを我慢し続けられれば、どうにか脱出口がみつかるだろ。

とりあえず、しばらくはあっちの議論に耳を傾けて……って美咲は！？あいつ何も離すことなく職場放棄！？

周りをキョロキョロ見回してみても美咲の姿が見当たらない。一体どこ行っただ？と考えていると、次はスピーカーを通して誰かの力ウントダウンが聞こえてきた。

「10・9・8……」

この声は……まさか、美咲か？なにをやるつもりだ、あいつ？あたりの人間は、まったく意味がわからず、樹でさえリアクションに困っている。だが、例外がいた。

「3・2・1・0！」

0の掛け声と共に、凄まじい爆音とマイクを駆け巡り響く雄叫びハウリング。その二つによって体育館の中の人間は、驚きによって体が硬直するか、目を閉じて耳をふさぐかのどちらかだ。だが、そのどちらのリアクションをとることもなく、行動を開始する奴らがいた。

「よし、準備は整った！浩介、逃げるよ！もう手錠外してるんで

しよ！」

純がそう叫び、体育館の入り口の扉を孝昌が蹴飛ばした。亜衣の方は、美咲がすでに救出してくれているようだ。

「おお、さすが純、美咲、孝昌！持つべきものは友達だ！」

俺もすぐさま純と一緒に体育館から逃げ出した。

「畜生、あいつら謀りやがったな！みんな、もう一回捕まえてきてくれ！今度は1万円出す！」

樹の野郎、生徒たちの闘争心に火をつけやがって！だが、HRの時間まであと2時間だ、逃げ切つて見せるぜ！

「1つ聞きたいんだけどさ……浩介と広瀬さん、てどういった関係なの？」

走って逃げながら純が聞いてきた。いきなり核心をついてくる質問だ。

「ただの彼女、とかつてのじゃなさそうだな。どういう関係なんだ？」

前を走る孝昌が孝昌もこっちの方に振り向いて聞いてくる。つかすこいな、後ろ向きで走って俺たちとあんまり変わらんのか、こいつの速度は。

「……わかった、話すよ。でもできれば他の奴には話さないでくれよ？」

そして、俺は亜衣が俺の家同居してきたことから、一応大まかに説明をした。

「で現在にいたる、て感じだな。」

「なるほどね。本当はもっと詳しく聞きたいけど今はそれどころじゃないからね。詳しく話してもらうのは後でいいよ。」

一応、全員ひとまず落ち着いてくれたようだ。なんのリアクションもなかったのは、俺にとっては結構うれしかった。

「とりあえず、ここらで止まって作戦を考えよう。ここからどうする?。」

こうなった時の作戦参謀こと孝昌がみんなに問い掛ける。まあ流石に5人に増えると逃げづらくなる。なにせ目立つし、何より今回は亜衣という荷物をしよっているからな。なんか考えないとどうしようもないよな。

「こうなったら、ひとまず校外に逃げるしかねえんじゃないか?。」

俺がそう発言すると、まるで可哀相な物でも見るような目で孝昌が俺を見る。なんだよ、普通の提案だろ?

「いいか、そんなもんは全員考えることなんだよ。問題は、その出口が相手に押さえられているこの状況でどうするかっつー話だよ。」

なるほど、そういうことか。校門の前を通ったわけでもないのに封鎖されてるって事がわかるあたり、流石の洞察力だな。……だから、俺が馬鹿ってわけじゃないぞ?孝昌が良すぎるだけだからな?

とりあえず、まともな出口が封鎖されたってなると、残る手段は

……

「ってなると、やっぱり『アレ』を使っちゃう?。」

「あ、やっぱり美咲ちゃんもその考えにたどり着く?。」

「純もか。んじゃ孝昌、全員の意見が一致だ。『アレ』を使っぞ。」

満場一致で、俺たちは『アレ』を使うことにした。『アレ』って

何かって？そりゃ秘密だ。

「OK。『アレ』に関しては、みんなが使ってる奴以外に他に2つ当てるがある。普段3年生のヤンキーがたむろしてる部室棟裏と職員室だ。3年がわざわざ少しばれやすいところであむろしながらタバコを吸えるってことは、おそらく逃げ道があるからだろう。職員室も同じだ、非常時に逃げ出すためには、職員室にも一つつけたほうがいい。というわけで、この2ヶ所を探して外に出るか？」

流石は孝昌、いざって言う時に一番頼りになる男だぜ。これだけのことを瞬時に考えられる

「んじゃ、そこの2つを探そうぜ。どっちを先に行く？」

「部室棟に行くべきじゃないかな？僕たちだったら別に喧嘩売られても負けはしないだろうし。」

「そりゃそうだ。逆に職員室だと、先生が1人でもいたらアウトだからな。」

というわけで、目的地は部室棟裏のヤンキ どもがたむろしているところに決定した。

……にしても、なんだろう？純が購買部で俺を奇襲していたときにも感じていたんだが、なんというかみんなの放つ雰囲気というのがピリピリしている。もしかして……

「お前ら、なんか怒ってんの？」

「……当然でしょ。」

普段このようなことを聞いたら美咲が答えるものだが、今回はめずらしく純が返事をした。純はめったなことがないと怒らない温和な性格なので、他の奴も怒っているに違いないだろう。

「なんでこのこと黙ってたんだ？ちよつと重要そうな話だけだよ。」

さっきまで面白おかしくイベントに参加してた奴が言うセリフかと突っ込もうとしたが、明らかにそういう雰囲気ではないな。それに、おそらくこいつらのことだ。多分アレは俺に対する報復だったんだろう。確かにしんどかったしな。

「確かに何も聞くな、てはいつてたけどさ、少しくらいは教えてくれてよかったんじゃないの？」

そういえば純は、俺が亜衣と一緒に登校してたのを見てたな。たしかにこういった少し重要そうなことを黙っていたのだとわかれば、少し怒るだろう。

「私たちの間で隠し事はなし、でしょ。どうでもいいことはともかく、なんでこんな大事なことを言わなかつのよ？」

こいつらが怒るのももつともなことだ。俺も俺で、なんでこいつらにまで黙っていたのだろう？と考えてしまう。

「あ、あの……喧嘩は、よくないです……」

亜衣も、なんだかこの重い空気で心配になったのか、先ほどまでずっと黙っていたのに、いきなり口を開く。

「安心しろ、喧嘩とかじゃない。」

亜衣の頭をなでてやりながら、とりあえず落ち着かせることにした。まだ不安そうだが、先ほどまでよりはまだ落ち着いていた様子だ。

「今回のことは、俺が悪かった。本当にすまない。」

全面的に、今回は俺が悪い。謝るのが筋、というものだろう。

「……まあ、いいや。とにかく、学校からはやく逃げよう。謝罪はあとからしっかりしてもらってからね。」

「うまく逃げれたら、今日の晩御飯は浩介のおごりだからね!」

そういつて、全員は再び部室棟裏へと足を進めた。

「悪い。みんな、ありがとう。」

「似合わないこというな、気色悪い。」

苦笑いしながらの孝昌の返事。やっぱり、こいつらはいいやつだ。俺は、かなりの幸せ者だろうな、と心の中で思った。

『アレ』を求めて部室棟裏までたどり着いたが、やっぱりいうかヤンキの方々がたむろしている。かくれんぼしてた俺たちが言えることではないが、授業参加しろよ。……ごめん、今のやっぱ無し。蒼月学園でそんなこと言えるもんじゃないよな。

「先輩方、すみません。ここに『アレ』ないか探させてもらいますね。」

純がずいずいと進んでいく。俺たちもそれについていく。

「まてや、こら。誰が通っていいつつた！？通りたきゃ10万はらえ！」

やってることが古臭いぞ、おい。こんな馬鹿に付き合うのもなんだしな、さっさと終わらすか。

「孝昌、美咲と亜衣を守りながら『アレ』探しててくれ。俺と純でこの馬鹿たちのしておくから。」

「えっ、僕も！？仕方ないな。」

と、いうわけで、俺と純で不良どもをのすことにした。

「ぶざけんな！！ぶっ殺し……」「はい、遅い！！」

相手が全部セリフを言い終わる前に、顔面めがけて思い切り蹴りを入れてやった。一発でノックアウトか。弱いな、こいつ。

「はい、次は僕の番」

純も、とにかく手当たりしだい近くにいる奴を殴っていく。さっき嫌々つぼかったくせにノリノリだな、おい。

俺も悠長に敵を一人一人つぶすのも面倒くさいので、純と同じく不良どもを殴り飛ばしていく。全員潰すのに10分とかからなかった。

「でかいのは態度だけだったな。ひい、ふう、みい……10人はいたみたいだな。」

「ホント、たいしたことなかったね。」

実際、これが俺の普段の日常だった。まったく、親父のせいでもやこしい日常に変わってきそうだな。

「おい、見つかったぞ！例の『アレ』！隠し通路だ！」

孝昌は隠し通路をしっかりと見つけてくれたようだ。……非常識とか言うなよ？そんなもんはこの学園の理事と校長に言ってくれ。

孝昌の見つけてくれた隠し通路は、部室棟裏にあるマンホールから、学校のすぐ外にあるマンホールへとつながっているものだった。まさか偽物のマンホールがあるとは、正直思っても見なかったな。

「浩介くん、荷物はいいの？」

「今は逃げるのが優先。荷物なんざ、2の次だ。」

そうさ、今は逃げるのが優先だ。もしかしたら、校外まで追っ手が来るかもしれないので、俺の家まで逃げることにした。

家に帰っても、まだ親父はいなかった。それにしても、まさかアンパン如きで気絶するとは思わなかったな。

「親父がいないからリビングを使ってもよさそうだ。」

いやまあ、いても勝手に使ってるけどね。俺に限らずこいつら全員。

取り合えず、俺は「さっ」とコーヒーを淹れ、全員に配る。

「今日は晩飯、食ってくか？」

まだ晩飯まで数時間あるが、話す内容がこれしか思いつかなかった。

「もともとお前がおごる予定だったろ？」

「そうね。それじゃあ、今日は浩介の手料理で我慢してあげるわよ。」

「

「僕も。」

「ん。OK。」

晩飯は何にしようか、と考えながら台所へと歩く。

「大勢いるし、カレーでいいか。いや、それは昨日作ったから芸がない。ふむむ、どうしよう、お好み焼きでも作るか？」

そう考えると、すぐにキャベツを取り出しきり始める。その他の食材、お好み焼きのもとなどを鍋に入れかき混ぜ、下ごしらえを済ませた。下ごしらえを終わらすと、またやることなくなる。その間、荒神家の家の中は非常に暗い雰囲気になっていた。だって誰も喋らないし。

「うっうっうっうっ……うあああー!!」

美咲がいきなり叫び始めた。どうした、とうとう人の限界を超え獣になったか？」

「暗い！！暗すぎる！！もっとポティシブに行きましょうよ、ねえ！？こんなに暗いの、私絶対ダメ！！」

うるさい女だな、お前がダメだろうが知ったことか。

「えっと、それじゃあ親睦を深めるために、明日親睦会でもやりましょ！最低でも、このメンバーには広瀬さんもなじんでもらわないといけないし。」

別に悪い提案ではない。ちなみに明日は校長の娘の旦那の誕生日なので、休みなのだ（それくらいで休みになる学校は普通ないが）。

それに、亜衣が俺にくつついて行動するのなら、こいつらとは最低でもなじまないといけない。

「あ、自己紹介がまだだったわね。私、清田美咲、呼び捨てでいいからね。その代わり、私もあんたは亜衣って呼び捨てで呼ぶからねっ！」

「僕は伏見純。僕も呼び捨てでいいよ。」

「あゝ、俺は斎藤孝昌だ。趣味は女性と一緒にすることだったらどんなスポーツだろうかなんだろうがすべて趣味になる！」

美咲と純は普通の自己紹介だが、孝昌は精神状態が普通に帰ってしまったので、単なる女好きに戻ってしまったため、変な自己紹介だ。こいつは真面目にしないといけない時以外、このメンバーで一番軽い性格なのだ。そういえば……

「お前、亜衣は口説かないんだな。」

孝昌は、女性を見れば、誰かの彼女だろうと、婚約者だろうと人妻だろうと自分の守備範囲以内の年齢ならくどく男だ。なぜ亜衣を口説かないのだろう？

「俺は人の彼女とかは口説かないよ？」

「嘘つけ！お前これまで何人のカップルを別れさせてきた！第一俺とこいつはカップル関係にはないぞ！？」

そういいながら亜衣を指差す。

「なにいつてんだ、あんなに格好良く亜衣ちゃんを背負って必死に走ってる姿、大半の人間から見たらお前と亜衣ちゃんはどこから見てもカップルっぽいぞ？それに、俺は見ててむかつくカップルを分かれさせているだけであって、すべての人の彼女を口説いているわけじゃねえ！」

熱弁されてもな。ホント、こいつの真面目な時と普通の時はギヤップがありすぎるぞ。

「んじゃ、とりあえず親睦会に呼べる人、探しておくわね。」

携帯を開いて、何名かにメールを送っている様子。

「え、ちよっ……」

「亜衣、拒否権はなし。こついうことはしっかりしておかないと、クラスになじめないわよ。」

「でも……浩介くん……」

なんでもかんでも俺に頼るな、こいつ。でも、親睦会とかは、し
といたほうがいいとおもぅ。ここでこの意見を否定することはない
だろう。

「大丈夫だ、亜衣。クラスに変な奴は多いが悪い奴はいないから。」

「浩介くんが言うなら……」

この会話を聞いていた3人が、口元をニヤニヤさせている。

「ホント、あつたあつたね。」

「見ててこっちが恥ずかしいわ。」

「それでよくカップルじゃないと否定できたな。」

むかつー！

「うるせえー！お前ら飯くわさねえぞー！」

「うわーん、権力の横暴だー！」

俺が怒鳴り散らすと、3人とも「わー」とか言いながら部屋中逃
げる。

「はあ、仕方ない。とりあえずお好み焼き、作るか。」

ホットプレートに電源を入れ、さつさとお好み焼きを焼いた。みんなですつさをさつさとたいたらげ、その後すぐに解散した。

「晩飯サンキュー！！じゃな」

そんなことをいいながら、みんな家を出て行った。

「あの人たち、いい人たちみたいだね。浩介くんの親友？」

少し考えた後、俺はこう答えた。

「親友……か。どっちかって言うと、俺にとって一番大切な「仲間」だな。」

続く

第六話 「親睦会」

ピピッ、ピピッ、という機会音目が聞こえてくる。

「もう朝か。冬は本当に朝がきついな……」

ふあっ、と大きなあくびが出る。目が覚めてからもしばらくは睡魔と戦闘だ。かなりの眠気を感じるが、とりあえずさっさと布団から出て着替えを済まし、朝食を作りに一階に降りる。

「今日の朝食は……眠いからお手軽作品でいいか……」

食パンを2枚トースターに入れ、フライパンで目玉焼きを2つ作る。

「あ、亜衣の分忘れてた……まあ、いいや。親父の分をあいつにやるわ。」

朝食の準備ができたところで、フライパンとおたまを取り出した。いわゆるひとつのお約束、である。

「起きろ！！朝だぞ！！」

おたまでフライパンを叩きまくる。漫画チックな感じがするが突っ込まないでくれ、所詮俺の日常は困難だ。

「浩介君……起こすときはもっと静かにやりなさい……！」

親父が部屋からふらふらとした足取りで、眠たそうにしながらも

若干怒り口調で出てきた。

「普通のやり方じゃ起きないからな。俺たちと違って親父は仕事があるんだから、さっさと起きてもらわないといけないんだよ。」

親父はそのままふらふらとした足取りで席につく。そして二階からもすぐに亜衣がおりてきた。

「耳鳴りがするよ……」

「我慢しろ。叩いている本人はもったときつい。」

未だに先ほどの騒音のせいで耳がガンガンするが、それは我慢しととにかく朝食を済ますために、亜衣をイスにすわらし俺自身もイスに座った。

「んじゃ、さっさと朝飯を食べようぜ。」

俺はトーストにかじりつく。亜衣もトーストにかじりついた。が、親父だけはかじりつかない、いやかじりつけない。

「あゝ、浩介君、僕の朝ごはんはどこかな？」

「悪い。作り忘れた。」

軽く気持ちのこもっていない謝罪を済ますと、すぐにまたトーストにかじりついた。周りに気を使う亜衣だったら、ここで何か言うのだろうが、まだ眠いらしく何の発言もしない。眠気ってすげえな、おい。

「ちょ、浩介君！それはあんまりだよ！嘘だといっておくれよ！」

「だ、うるさい！朝からお前のテンションにあわせてられねえんだよ！少しは黙って食べ！」

「食べるものもないのにその命令はひどくない！ねえ、そう思わない、浩介君！？」

「あ、もう、うるせえ、うるせえ！俺の目玉焼きくれてやるからさつさと食って仕事へ行け！」

親父の前においてあった何も乗っていない皿に俺の皿においてあった目玉焼きを置いてやった。

「ぶーぶー、こんなんじゃないよ！」

「だあ！ガキみたいに駄々こねんな！うざいだけでなく気色悪い！年齢考えて発言しろ、お前は！」

ああ、もうこいつとくだらない漫才するのもホントいやになってきたな。さつさと朝食を済まし、俺は自分の部屋に戻る。

『 』

ガチャ、と部屋の扉を開けると同時に、それを待っていたかのように着メロがなり始めた。

「なになに、親睦会の予定は、11時からカラオケ、7時から俺んちでいつものメンバーのみ晩飯、か……ん、なんだ、追伸？……」
カラオケは浩介の知らない店ですので、案内しないといけないか

ら10時にあたしの家に集合』か。10時からか。まだ2時間はあるな。」

窓の外を見ると、親父が車に乗って家から出るところが見える。親父が家から出たことを確認できたところで、亜衣に親睦会の予定を伝えるに一階に降りる。

「あ、浩介くん。昨日清田さんが親睦会するって言ってたけど、実行されるの?」

「どういふ予定か、を聞くのではなく、本当にするかどうかを聞くとは、こいつ結構変わってるな。」

「あいつのことを『さん』付けて呼ぶな、気味が悪い。本人が言っていたように、呼び捨てでいいんだよ。」

「うーん、でも……」

「学校で俺と一緒に行動してたら絶対あいつらとも親しくならないといけないんだ。なのにお前があいつのこと『清田さん』なんてよんだら、みんなひくぞ。」

「……ひくことはないと思うけど……」

「それでひくのがあいつらだ。」

まあ、知り合ったばかりで呼び捨ては正直難しいかもしれないが、俺のことはすぐに『さん』付けせずに呼べるようになったんだから、それくらいすぐにできるだろう。

「とりあえず予定はこの通りだ。」

俺はさっき送られてきたメールを亜衣に見せる。

「2時間もあるから、ゆっくり用意しとけ。」

「うん。わかった。」

亜衣は2階に上がり、自分の部屋に入り支度をはじめた。

俺も自分の部屋に入り、支度をはじめた。

「持っていく物はMDウォークマンくらいだな。ディスクはBUM Pでいいかな。」

お気に入りのMDのディスクの中から1枚抜き取る。それをウォークマンに入れて机の上においた。

「なんかまた睡魔が襲ってくるな……まだまだ時間はあるし、ちょっと寝ようかな……」

ベットにどかっ、と倒れこむと、すぐに意識が飛んでいった。

「ん、……けくん、…介くん、浩介くん!!」

ドアをどんと叩く音で目がさめた。

「まだ出なくていいの？もうすぐ10時だよ？」

……

……

……なんですか？

時計に目をやると、短い針は10を指し、長い針はちょうど12を指していた。

「うおおおおお、やべえ!!」

大変だ、遅れちまう!ここからあいつの家まで走っても10分はかかっちゃう!

「まずい!急がねえと……」

焦りながらドアノブに手を置いた瞬間、携帯が鳴り出す。まさかと思いつつ、そそりりと携帯を覗き込む。

『送信者 美咲』

……どこと泣く嫌な予感がするのは何でだろうな？

『遅刻。』

不満メールを送りつけてくるの速くないか？……って、ん？よく見るとまだ下に何か書いてあるな。

『窓を開ける、今すぐ、さっさと！』

……嫌な予感、上昇。ともあれ、逆らったら余計に嫌な予感がする。ここは指示通りに窓を開けて……って、下に誰がいるな。あれは、美咲と純？

「ふざけんじゃないわよ、馬鹿野郎！」

下にいた美咲は、怒りの雄叫びをあげながら俺が開けた窓へと数個の爆竹を投げ入れ……

「っておい！ちょ、おま、待てやアアアアア！」

冷静に分析してる場合じゃないぞ、俺！なにやってんだ！

ドアを勢いよくバタン！と開け、目の前にいた亜衣の手をひき階段を二段飛ばしで降りていく。

「きゃっ！わああああ！浩介くん、危ないよぉ〜！」

「悪い、ちょっと我慢してくれ！」

玄関近くまで行ったところで、俺の部屋からあきらかに並みの爆竹数個じゃなるはずのないほどの超爆音が鳴り響く。多分、この前

の学校の体育館での大爆音もこいつの作った特製爆竹が活躍してたんだろうな。

「おいコラ、美咲！」

「うるさい、馬鹿浩介！覚悟なさい、せめて選択権をあげるわ！無茶苦茶痛い鉄拳10回と、とてつもなく痛い鉄拳10発、どっちがいい？」

「ちょっと待て！その二つはどう違うんだ！？俺には違いがわからない！」

などという俺の抵抗も空しく、美咲の全力の平手は俺の左頬を捉える。グハツ！滅茶苦茶痛い！

「ふん！今日のところは平手で勘弁してあげるわ！」

全然勘弁できてねえよ。ほら、目にうつすらと涙が出てきやがった。

「浩介、ちょっと遅かったね。寝坊？」

「この季節だと、睡魔には勝てんかった。ところで孝昌は？」

「時間ギリギリまで難破……いや、ナンパだってさ。」

「まあ、いつものことだがな。ところでお前ら、何でここにいるんだ？集合場所は美咲の家だろ？」

「そんなことより、用意が終わったならさっさと行くわよ！あんた

が遅刻したから、遅れるかもなんだから！」

美咲は、「あんたが遅刻したから」という部分を強調して言った。なんで俺だけ？ 亜衣は？ それ以前にさ、俺の質問にくらいは答えてくれよ。」

「みんな歩いていくの？ 遠い場所なんだったら乗り物に乗ったほうがいいんじゃないかな？ ほら、自転車とか。」

「……」

しばし沈黙。

「普通に歩いたほうが健康のためなのよ！！」

「わかったわかった。お前が自転車に未だに乘れないのはよくわかったから。」

「う……」

悔しそうなうめき声をあげて俯く美咲。今更な話だが、こいつはかなりの運動音痴。だってさ、自転車乗れないんだぜ？

「でもホント、未だに自転車に乗れないのって珍しいよね。ねえ、浩介？」

「正真正銘、超真極完全無欠のスーパー運動音痴だからな。来世になってもこの運動音痴は引き継がれることだろうな。」

さっきのビンタの分、しっかり返させてもらわないとな。いまだ

にひりひりしやがるぜ、ぶたれた場所。

「こ、浩介くん、言いすぎだよ。私も運動苦手だから、たまに自転車とかうまく乗れないこともあるし……」

ここで亜衣が軽く止めに入った。しかし、嘘丸出した。せめてもうちょっとうまく嘘をつけ、孝昌はどうまくなくていいからさ。だが、そのセリフを聞いて、美咲の方は何か感銘を受けたらしい。俯いた顔をバツと挙げたかと思うと、目をウルウルさせて亜衣を見た。

「きゃ〜〜ん！亜衣つてば優し〜〜〜！」

美咲は、いきなり叫びながら亜衣に抱きついた。亜衣は、当然のことながらおろそろしている。

「え、ちよつ、清田さん!？」

「も〜、そんな堅く呼ばずに、美咲でいいわよ!！」

はたから見れば、結構ほほえましい光景だ。この調子で亜衣がみんなになじんでくれれば大助かりなんだがな。

「と、ところで美咲ちゃん、はやく行かなくていいの?」

「およ?ああ、そうだったわね。じゃ、行きましょつか。」

機嫌を大戻してくれたようだ。もし、亜衣があそこで美咲を哀れまなかつたら、もう一発ピンタが飛んでいたかもしれないかな。あんだけいじってなんだが、俺は内心結構ホツ、とした。

「んじゃ、レッツラゴー！」

美咲の先導のもと、俺たちはカラオケ店へと向かった。

カラオケ店には、見知った顔の連中が十数人と、孝昌、樹のやろ
うがいた。

「え、これより、広瀬亜衣ちゃんの親睦会をはじめます！」

「おお〜〜！」

美咲の掛け声で、みんなが叫んだ。

「んじゃ、カラオケBOXに突入〜〜！」

わああああ、と、みんなが店内へ入っていった。部屋がわからなくなったら困るので、俺たちもそれを追いかけた。

「最初、誰が歌う!？」

美咲が大声で尋ねると、みんなが俺を指差す。なんで？

「やっぱ初めは荒神だろ!!」

「お前BUMPとかの歌得意だろ!!」

そういえば、カラオケを何回かしたことがあるが、毎回俺が最初だったな。まあ、いいや、歌ってみるか。

「んじゃ、BUMPの「ハルジオン」、よろしく!!」

俺だけ「だり〜」なテンションでも仕方ないので、俺もハイテンションになることにした。

「〜僕の中で揺れるなら〜折れることなく揺れる　ゆるぎない信念だろ〜!!」

結構熱唱した。点数は……

「うおっ、87点!!」

「よっしゃ!!」

そんなに悪くはない、いや、むしろいい!俺の歌は、「コンピューター」にも支持されている!

「次、俺が歌うぜ!!」

一人の男子が立ち上がった。マイクを渡してやると、マツケンサンバ2を熱唱した。いや、古っ!まだこれ歌う高校生いたのか!

「オレイ!!!」

全員乗り降りて手拍子とかをしながら歌を聴いていた。点数は……

「82点!」

これまた結構点数たかし。次にマイクを持ったのは……

「んじゃ、次は俺が歌うぞ。」

孝昌だった。ここでみんなのとった行動は……

「みんな!死にたくなかったら耳をふさげ!」

「おう!」

亜衣以外、己の耳をふさいだ。

「ちょっと、待て!!!それはひどいぞ!!!こうなったら、この前よりどれだけうまくなったか、聞かせてやらあ!!!」

孝昌が歌いだした。スピーカーから出てくる声は、耳をつんざく死霊の歌声に聞こえた。言っておくが、私的な比喻表現とかしたつもりはないぞ。マジだからな、これ!

「みんな!!!死ぬんじやないぞ!!!」

必死にお互いを励ましあいながら意識を保つ。すでに亜衣はノックアウトしていた。

「点数、0点」

当然だ。1点でもあったら、びっくり仰天だ。つーかあったら俺がこの機会を作った会社に苦情を出すっつのだ。

まあ、わかったと思うけど、こいつはおぞましいほどの音痴なのだ。

「うわああああ、頭ガンガンするよ〜〜」

亜衣はすでに正気を失っていた。その後も、孝昌以外の奴に順々にマイクが回り、長い時間をすごしていった。

カラオケで騒ぎまくった後、解散すると、俺、亜衣、純、美咲、孝昌は俺の家に向かった。晩飯である。

「普段は外食で済ましてるのにな。」

「いいじゃん、たまにはさ。」

純が俺の家の扉を開ける。それは俺がやるべきことじゃないのか？

「さて、じっくり味も染みてるかな？」

「え、浩介くん、何の事？」

実はこんなこともあるとかと、チャーシューを鍋に入れて、ずっと煮込んでいたのだ。寝る前にこれだけは済ませといてよかった。

「スープはもともとからあるから、すぐにでもラーメンが作れる。テーブルで待つとけ。」

「お、イエス!!」

俺と亜衣以外は、全員リビングのテーブルのイスに座った。

「浩介くん、私も何か手伝うよ？」

「いって。お前は、あいつらと話してこい。」

少しためらいながらも、とてとてとテーブルに向かった。このまま、しっかりあいつらになじめたらいいな。

続く

第七話 「JUN'S SISTER」

「さあ、昼休みだ！飯だ飯！」

今日はひよんなことから朝飯を作ったにもかかわらず朝飯を食いそびれてしまった。なぜかというと、美咲の後ろに座っている奴が中々起きなかつたからである。

「ゴメン、昨日騒ぎ過ぎちゃったから……」

苦笑いながらおぼつかない足取りでこちらによつてきた。

「謝んなくてもいいって。悪いのは未成年に酒を飲ませた美咲と孝昌だから。」

そういつて美咲をにらんだ。苦笑いをしながら両手を合わせて頭を下げる。一組の教室を方を窓から見みると、孝昌も手を合わせて謝罪の意を示している。あいつの耳はどんだけいいんだ？

「まあそんなことより、さっさと昼飯にしようぜ。いざ、目指すは購買部！」

そういつて教室の入り口に向かって歩こうとした時、ふいに扉がガラガラ、と開いた。そこには、背丈を見た感じ、一年生であろう茶髪の小さな少女が立っていた。（この学園では、学年を見分けるための違いは何もない）

見覚えのない少女だが、このクラスに何か用だろうか？いや、用がなければわざわざ来ないか。

「すいませ〜ん！！伏見 純っていう人いませんか〜！！」

純を呼んでるってことは純の知り合いか。でも、俺はあんな奴知らないぞ？俺は大抵純と一緒に居るから純の知ってる奴はほとんど知ってるはずなんだが。

そんなことを考えていると、少女は純の存在に気付き、とことくと近づいてきた。

「あ、いたいた、お兄ちゃん！！」

.....

.....え？

「オニイチャン！？」

という叫び声をあげようとしたのだが、俺が叫ぶ前に教室にいきなり入ってきた孝昌が叫んだ。女のこと絡むと、こいつは人間の限界でも超えるのだろうか？

「ん、どうしたの、司？」

「もう！お兄ちゃん、お弁当忘れてたでしょ！せっかく作ったんだからちゃんと食べてね。はい。」

手にもっていた弁当を純に差し出すと、「それじゃ。」と言って満面の笑みを浮かべて去っていった。ガタン、という音をたて、少女「司」は去っていった。その後、教室の中の人間の時は止まって

いた。(純を除く)

「さて、お昼お昼、あれ、浩介、美咲ちゃん、みんな、どうしたの？」

そう首を右に左に動かして、「あはは。」と苦笑いして頭を掻いた。

「言っただけだったっけ？」

「聞いた覚えがない。」

短い返答に対して、「あちゃちゃ。」と言いながら頭を掻いた。

「さて、このことについてはじっくり聞かせてもらおうか？」

後ろから孝昌が純の肩にポンと手をおいた。

「純、お前にいつから彼女ができたのか。そして、いつから他人に「お兄ちゃん」なんて呼ばす趣味を持ったのか。この2つをしっかりと聞いてもら……いでっ！」

身をすばやく翻し孝昌に綺麗なボディーパー。うん、ナイス純。

孝昌は腹を抑えながらその場にうずくまった。純は笑顔だったが、額のすみには怒りマークを浮かべていた。

「でも、んじゃ今の子誰だよ？お前に妹がいたなんて知らないぞ？」

「私も聞いたことないわ。いたら絶対私たちわかるはずよ？」

俺と美咲は純が5歳くらいからの付き合いだ。俺たちが知り合ってから12年間も妹の存在を隠せたわけないし、隠せたとしても隠す必要がない。

「まあ、浩介たちが知らないのも無理ないよ。だって僕もつい最近まで知らなかったし。」

それだけ言うと、すぐに教室を出て行った。別にこれ以上話したくない、という意思表示ではなく、あまり大勢に言うつもりはないから早めに屋上に来てくれってことだろう。

この答えがあつてゐるって確証はないが、長い付き合いだから純の考えることは大抵解る。その辺は美咲もしっかりわかっているようだ。

「純くん、怒っちゃったのかな？」

亜衣は心配そうにしているが、なんら心配する必要はない。

「あいつは別に怒ってないよ。だけど、待たせるのも失礼だな。早く昼飯かって屋上に行こう。」

俺たちもすぐに教室を出て、購買部に向かった。昼飯をかって、さっさと屋上に行かないとな。

「やあ、みんな。結構早かったね。」

屋上に行くと、弁当のふただけあけて待っている純の姿があった。

「まったく、なんか一言くらい言ってけ。亜衣が何気に心配してたんだからな。」

「いや、ごめんごめん。」

毎度おなじみの柔らかい笑顔を見せると、外してあったふたから箸を取り出した。

「みんなも、ほら、早く食べようよ。」

みんなも純のそばに座り、各々がかったパンを袋から取り出しかじりだした。

「んで、純。さっきの子は一体誰なんだ？」

俺は焼きそばパンにかぶりつきながら聞いた。

「僕のことをお兄ちゃんって呼んでるんだよ？妹に決まってるじゃん。」

あたかも当然のことを言うかのような口調だった。

「でも、私たち、あんな子見たこともないわよ？」

「さつきも言ったでしょ。僕だつてつい最近知ったんだ。」

そう言つて弁当の中のおかずをパクリ、と口の中に入れた。そして、純はあの少女、司との出会いを話し始めた。

一週間前、つまり、浩介が亜衣ちゃんと会うちよつと前だね。雨がふつてて、あの日はすぐに解散したでしょ？

ああ、亜衣ちゃんは僕の家に着いて知らないよね？僕の家には3歳の頃から親が仕事で出かけてて、一度も帰ってきたことがないんだよ。だから、僕はいつも一人で家で過ごしてるんだ。

その日は一人でソファーに寝転んでトランプいじつてマジックの方法とか考えてたら、ふいに「ピンポン」て音が聞こえたんだ。

「は〜い、誰ですか？」

まあ、こんなリビングで声出したって意味がないのはわかってただけだね。とりあえず、僕は起き上がって玄関に向かったんだ。

「あの、ここって伏見さんのお宅ですよね？」

がチャツ、と玄関の戸を開けると、目の前には短い茶髪の女の子がちよこんと目の前にいたんだ。

短い髪も、雨ですごくくぬれてて、風でもひいてそうな感じだった。現在一月下旬のこの季節、これだけずぶ濡れになったら、風邪を引くのは時間の問題、そんな感じ。

「き、きみ、大丈夫！？え、えっと、どうしよう……！！な、なんだか知らないけど、とりあえずあがってあがって……！！」

「あ、はい………すみません。」

そのままその子を家に入れてあげてから髪とか乾かした後、まともな話を聞くことにしたんだ。でも話を聞いて、僕もホント驚いたよ。だって、いきなり僕の妹だって言うんだから。

「……………は？」

長い沈黙の後、僕の口から出た第一声はそれだった。

「ですから、あの、私、あなたの妹なんです。あの、一応、証拠になるかな、と思って写真、持ってきたんですけど。」

手渡されたのは、この子が生まれた時の写真（？）や、僕の親と一緒にいる子のこの写真だった。

「で、司ちゃん、わざわざアメリカまで何しにきたの？」

両親がまだ移動をしていなければ、今ごろアメリカのとあるラボでまだ研究を続けてるはずだ。ああ、ちなみに僕の両親は科学者ね。結構優秀らしいよ。

「私、つい先日、お兄ちゃんがいることをお母さんに聞いたんです。それで、どうしても会いたくなって……それで、親の反対を押し切つて、ここまで来たんです。お兄ちゃんに、どうしても会いたくなつたから。」

まあ、いるとは思っていなかった兄がいると知れば、それが普通だろうね、うん。しかし、ホント凄いな。この子がここまで来たこともそうだけど……

「あの親が、まさか僕のことを覚えてるとは思わなかったよ。」

それも、住所までしつかりね。お金も残さず、この家にはほとんど何も置いていかずに僕だけを置いてアメリカのラボまで飛んでいった両親だ。

ほとんど、というより完全に捨てられた状態の僕のことを、まさか覚えていて生きてまだここにすんでることを知ってるんだから、たいしたものだよ。海斗さんがいなかったら、僕はすでに死んでたかもしれないのに。

「ん〜、で、会いにきた、ここまでがいいとして、これからどうす

るの？」

「え……この家にいちゃ、ダメなの？」

「あれ、ここにどどまるつもりだったの？てつきりすぐにもあの両親のところにも変えるのかと思つてたんだケド。でまあ、いてもいいけど、帰らなくていいの？君にとっては、大事な両親でしょ？」

うつむいてから、首を横に振つた。

「ううん。お母さんたち、ちつとも私にかまってくれなかつたの。ほとんど放置されたままだった。その時に、お兄ちゃんのことを知つたから、お兄ちゃんと一緒に生活したいな、て思つてきたの。あの、家事とかもちゃんとできる、だから一緒にいさせて！お兄ちゃんしか、もう頼れる人いないの！」

そういつて、泣きながらいきなり抱きついてきた。こんな小さい体で、一人で家事とかずつとこなしてきたんだろうな。あの親が、この子のために家事をしてやっていたとは思えない、研究を何より第一にしてる親だから。

「わかつた、わかつた、泣かないで。いいよ、いても。だけど、ちよつと僕との生活は大変だよ？結構雑な生活してるから。それでもいい？」

そういつても、司はためらうことなく首を縦に振つた。

「んじゃ、明日からは色々司の部屋とか作らないとね。今日はもう遅いから、僕の部屋で寝てて。ベット、勝手に使つていいから。」

2階の部屋まで案内してあげた。僕が1階に降りようとしたら、
司が口を開いた。

「…………お兄ちゃん。」

「なに？司。」

「…………ありがとう。」

「あははは 僕たち、兄弟なんですよ？そんなどうでもいいことで、
お礼はいいっこなしたよ。」

そのまま僕は1階のリビングのソファの上で、その夜はぐっぐりと
眠ったんだ

「と、いうわけ。わかった？」

全てを話し終わると、純はまた口におかずを放り込んだ。

「ん〜、なんていうか、その…………おめでとつ？」

何をいえばいいかわからず、とりあえず妹と出会えたことに対するお祝いを一言。確かに言われてみれば、さっきのこと純は似てないこともないかもしれない。髪の色はまったく違うが、顔立ちだとか、性格もなんかにてそうな感じだったし。

「まあ、そう言うことだから今日は早退するね。」

「ああ、わかつ……って、何で!？」

そう言うことだからって、それは早退の理由にはならないぞ、純!

「だ〜から〜、司の家具を買ってあげないといけないんだ。海斗さんにお小遣いもらったし、今日のうちにもう買ってあげたいんだよ。」

そう言うって、弁当を手持って校舎の屋上にはよくあるタンクの一つに近づいた。

ちなみに、この校舎の屋上、すなわちここにはタンクが5つ置かれていて。が、しかし一つはダミーである。その正体は……

「それじゃ、また明日、みんな」

純はタンクのダミーを軽くおした。すると、普通押すだけでは絶対開かない、というよりおしてあけるものではないはずのタンクが開き、中の空洞が見えた。

早い話、これが学校から抜け出すための隠しルートの一つだ、ということだ。

「よし、レッツゴー!!」

そう言って、純はタンクの中を滑って学校の外へと出て行った。ちなみにこれは、地下下水道につながってたんだ。臭いけど、まあ我慢できる範囲の臭さ。

「……また忙しいことになりそうだな。」

伏見 司、か。純の妹、か。新しい面子が増えると、ろくなことになりそうにない。そのいい例がすぐそばにいる。これからも平穏な日々がしっかり続いてくれることを、俺は切に願おう。

続く

第八話 「Rainy」

「まったく、なんでこんなにひどくなるかね。」

俺は亜衣と商店街へ色々と買い物をしていた。しかし、とある店から出ると……

「土砂降りだね……」

ホント、この季節にここまで凄い勢いで雨降られると、正直きついわ。出かけたときは晴れてたから、傘なんて持ってねえしよ。

「濡れて帰るか？」

「でもこんな季節にぬれっちゃったりしたら風邪ひいちゃうよ〜！」

まあ、そりゃそうだな。家までざつと3kmはある。走ってもずぶ濡れは決定だ。くそう、歩いてくるんじゃないかっただぜ。

「だけど、だからってずっととどまっとくわけにもいかないしな。雲見た限り、しばらくは止まないぞ、これ。」

ザー、という雨の音は、おそらく今日の間止むことはないだろう。こっから見渡せる空全部厚そうな黒い雲で覆われてる。雲どもめ、たった30分で空を覆うんじゃないやねえ、こんちくしょう。

「仕方ない、俺が走って家まで戻る。それからお前のかさをこっまで持ってきてやるよ。」

俺は荷物を置いて、上着を亜衣にかしてやり、軽く準備運動をはじめ。

「こ、浩介くん！せめて上着は着てたほうが……」

「濡れたら重くなる。それに、この季節に雨が降ってんだ。お前も寒いだろ、少しでも厚着しとけ。往復で30分前後で戻ってくる。じゃあな、少しの間、待つとけよ！」

俺は濡れること覚悟で走り始めた。この季節の雨に打たれるのは、正直体もこたえる。

「くしゅん！さみ〜！」

走り始めて約3分、服は濡れて、絞ったらかなりの量の水が出てきそうだった。だが、この冷たさが逆に俺を速く走らせる。普通の人だったら、この雨で体力を余計に消耗するんだろうが、俺は「これ以上濡れるのはヤダ。」と言う考えがさらにスピードをプラスしてくれている。

「到着！！！」

家には、10分でもたどり着けた。さつさと傘を取ろうと家の中に入ろうとしたら、中から親父が出てきた。って、おい。

「だから、いいかげん仕事に行け！！！」

反射的に俺は蹴りをぶっぱなつ。今日は日曜日、こいつは仕事の日だ。今は昼、すでに会社にいないといけない時間のはずだ。

「甘いな、浩介君！！そんなものでは、この偉大なる父を倒すことはできない……グフツ！」

蹴りは止められた。しかし、止められた瞬間、すぐさま顔面にパンチを入れる。これは流石に決まった。

「て、こんなくだらないことしてる場合じゃない！えっと……」

「傘なら、ほら。」

立ち上がった親父が手に持っていた傘を俺に投げ飛ばす。それをうまくパシッ、と取った。

「サンキュー、といたいところだが、何でわかった？」

「ほらほら、そんなことより亜衣ちゃん待ってるんじゃない？」

「ちっ！今からでもいいからちゃんと仕事行けよ！」

その傘を持ってそのまま亜衣の待つ店に向かった。

「……あれ？どこだ？」

店についた、そこまではよかったんだが、どこを探しても亜衣がない。どこいったんだ、あいつ、寒くなっただから店内にでも入ったかな？

「……中にもいないな。」

店内に入ってくまなく中を見て回ったが、中には亜衣の姿は見当たらなかった。もしかして、あいつ……

「勝手に帰った、とか？」

亜衣なだけにありえてしまうな。あいつ、もしかして俺に無駄な労力を使わせないように、って勝手に帰っちまったのかも知れねえ。亜衣はどうでもいいところで人に気を使いすぎるやつだしな。

もしそうだとすると……ヤバイ。

「あの馬鹿、こんな雨の中を帰ってたら絶対風邪ひくに決まってるだろうが！」

しかもあんなにいっぱい荷物も持ってるんだ、速く走れるわけがない。ちくしょう、どうでもいいところではっかり気い遣いやがって……！

いや、ここに来るまでにどっかですれ違ったはずだ、それに気づけなかった俺も悪いか。ならなおさら急がないと……！

「くそ！傘の意味なくなっちまったじゃねえか！」

さつさと走るためには、傘なんてさして暇もねえ！

そのまま手に傘を握ったまま、もう一回家に帰った。

「どづいつことだ？」

家の玄関を開けてみた。亜衣の靴はない。

「ここに来るまでの道のりにいた人の中に亜衣は絶対いなかった…
…じゃあ、なんで？」

……まさか、道に迷ったか？ この辺は結構道が入り組んでる。
商店街なんて、亜衣はほとんど行ってないんだ、そんなすぐに道が
覚えれるとは思えねえ。

「くそ！一体どこにいるんだ!？」

すぐにまた家を出て商店街辺りを走り回ることにした。ちくしよ
う、俺がもっと早く着いてたらこんなことにはならなかったかも知
れねえのに、俺は何をやってたんだよ!!

俺はすぐに商店街まで戻ってあちこち走りまわってみたが、まるで見当たらねえ。

「ちくしょう！亜衣、どこだ！」

叫んでみても、返事は返ってこない。周りの奴らが変な目で見るが、もはやそんなことはどうでもいい！あの馬鹿、一体どこにいるんだ！

「亜衣、亜衣！……ん？」

狭い路地裏の先に、赤色の髪の毛が見えた。もしかして、あれは……

「亜衣！」

赤色の髪の毛の女性は、バツ、と振り向いた。案の定、それは亜衣だった。

「こ、浩介くん……」

「この馬鹿！心配させやがって！」

はあ、どうやら無事そうだ。まったく、寿命が3年近く縮んだぞ。

「ゴメンなさい……3kmも浩介くんに往復で走らせるのは、ちょっと気が引けて……」

「お前はくだらん気遣いをするな。俺は別に10km走るのだって平気なんだ、6kmがどうしたってんだ。とにかく！今度からこんなくだらねえまねをしないこと！このことを肝に銘じておけ！」

「はい……」

……

ちょっと言い過ぎたか？ポリポリとほおを掻きながら少し考えてから亜衣の頭を軽く撫でながら言った。

「でも、気持ちは嬉しいよ。けど、頼むから無茶だけはすんなよ。お前のためにがんばったのに、お前が倒れらたら意味ねえんだからな……ホントに、ありがとな。」

それから亜衣の頭上に傘をさしてやり、雨に当たらないようにしながら家に帰った。

「もう7時か。晩飯作らねえとな。」

家に着くと、すでに外も真っ暗になっていた。もう晩飯を作る時間だ。

「亜衣のおかげで、見事なまでに中の食材たちは濡れてなえな。」

「亜衣の持っていた袋の中は、どうやってかばったのかは知らないが、中の食材には水一滴たりともついてない。」

「うん、お見事。」

「よし、予定通り今日の晩飯は麻婆豆腐、タマゴ豆腐だ。デザートにも杏仁豆腐を使って何か作っとくか。」

なんとなく、今日は「豆腐」と名前がついたものが食べたい気分だったのだ。俺は濡れた服を洗濯機に叩き込み、すぐに着替えて台所に立った。

「あ、私も手伝うね。」

そこに着替えてきた亜衣もやってきた。

「無理すんな。あんなに濡れまくったあとだぞ？ ゆっくりコタツとかであつたまつとけ。」

「濡れたのは浩介くんも一緒でしょ？」

「うーん、まあそりゃそうだがよ……じゃあ、手伝ってくれ。極力さっさと終わらすから。」

途中までは普通どおり調理をおこなっていた。亜衣がいるおかげでこれまでより順調に。しかし……

「亜衣、そこのお玉を……亜衣？」

顔を真っ赤にし、ハア、ハア、と荒い息を立てている。目もうつろになってて、すでにヤバそう。

「おい、亜衣！ 大丈夫……！」

バタン、と大きな音をたてて俺がすべてを言い終わる前に、亜衣

はその場に倒れてしまった。

「お、おい、亜衣！しっかりしろ、亜衣！」

どうすればいいのかわからなかった俺は、とりあえず亜衣の部屋に連れて行って、ベットに寝かせてやった。

「う……うん？」

氷枕を作ってやったり、熱冷ましシートをどこに張ってやったりと色々騒いで30分、ようやく亜衣が目を覚ました。

「39・3。お前の現在の体温だ。」

目を覚ました亜衣にそう伝える。

「お前、最初からしんどかったんだろ！？何でいわねえんだよ！！」

「……ごめんさい。」

「ごめんじゃねえ！！さっきも言っただろ！！無理すんじゃない！！」

大声が家中に響く。亜衣は今にも泣き出しそうな状態。

「お前が俺を気遣ってくれてるのは嬉しい、けどな……それでお前がダウンしちまったら、意味ねえじゃねえか……」

手で亜衣のほおにやさしく触れながら言う。

「お前はもつと自分を大事にしる。わかったな。」

そのほおに触れた手を、亜衣の頭の上におき、髪を撫でてやる。

「浩介くん……本当に、ごめんね。」

「そう思う気持ちがあったら、今はゆっくり休んで、さっさと風邪を治せよ。」

亜衣に向かって微笑んでやり、俺はそのまま部屋を出ようとする。

「ちょっとおかゆでも作ってくるよ。ちょっと待ってる。」

それだけ言い終わると、俺は亜衣の部屋から出た。

そして階段を降りて、すぐにおかゆを作り始めた。その時、俺はぼそつ、と呟いた。

「39・5 もある俺が亜衣にえらそうにも言えねえか。」

それでも意識が無茶苦茶はつきりしている俺は、ある意味凄い人間ではないのか？そう心の中で呟いた。

続く

第九話 「黒い夢」

俺は、とある道路を歩いているようだ。

俺は道路を渡る。まだ、信号は赤信号だったのに……

人通りの少ない道だった、それだけで、俺は安心してしまっていた。

「浩介！」

ドン！と、後ろから何かに強い力で押される。

「イタッ！」

俺はその力のせいです、4mふっ飛ばされた。そしてすぐに起き上がって振り返った俺の視線の先、そこにあっただのは、唯一親しかった人の亡骸

「うわぁ！」

目を覚ますと、いつもの朝と同様、俺はベッドの中にいた。時計を見ると、まだ夜中の1時だ。外は暗い。

「はぁ、はぁ。夢か……」

熱を出した状態で寝ると人は悪夢を見る、て聞いたことあるな。あれって本当だったんだな……

「クソツ……1日の始まりからいきなりあんな昔のことの夢を見るなんてよ……」

別に忘れたい過去ではない。いや、忘れてはいけない俺の過去。

「だからって、いきなり夢に出てこられても、きついただけだったの。畜生、寝てたのに疲労は10kmマラソンより激しいな……」

かといって、もう一回寝てまたあの夢をみるのは嫌だ。またあの夢をみて、今日1日を普通に過ごせることは、多分俺にはできない。俺にそんな精神力はない。

「……朝食、なんか適当に手の込んだものでも作るか。」

着替えを済ませ、1階に降りようとする。その際、俺の体は非常に重かった。まるで全身が鉄になったみたいな感じだ。荒神 浩介、目を覚ますとサイボーグになってましたってか、ははは、笑えねえ

……

「……お父さん、やめて……やめて、お父さん！いやぁ！お母さん

「！」

そんな声が聞こえてきた。声が聞こえてきたのは、亜衣の部屋から。心の中に凄く不安がつのる。

「亜衣！大丈夫か！？」

俺はすぐに亜衣の部屋に入った。亜衣は、とても息を荒くして苦しそうにしている。

「おい、亜衣！！しっかりしろ！！一回目え覚ませ！！」

亜衣に近づいて、必死に体を揺さぶった。悪夢を見ながら寝るくらいなら、いつそ起きたほうがましだろう。

「はあ、はあ………浩介、くん………？」

よかった、さっさと目を覚ましてくれたようだ。

「大丈夫か？かなりうなされてたみたいだが。」

「う、うん………もう、平気だよ………」

そうは言ってるが顔はまだ赤いし、息も荒い。とても平気そうには見えない。

「悪い夢でもみたのか？」

「うん………昔のこと、夢に見て………」

やっぱり、亜衣も俺と同じく、何かつらい過去があったんだろう。

「どんな夢だったんだ？」

「……ゴメン……今はまだ話せない。」

誰にだって、話したくない過去の1つ2つくらいは持ち合わせている。俺にだって、人に話したくない過去をもっている。だからこそわかる、亜衣のつらさが。

「わかった。じゃあ、話せるようになったらでいい、話してくれ。俺も、力になるからさ。」

それから亜衣の頭につけてあった熱冷ましシートを新しいものに張り替えた。それを終わると、「じゃあな」といいながら部屋を出ようとした。

「あの、浩介くん……1つ、お願いがあるんだけど、いい？」

ドアノブに手をかけたとき、亜衣が俺に話し掛けてきた。

「ん、なんだ？」

「……眠れるまで、手、握っててくれない？」

……なんというか、小さい子供がするようなお願いだな。

「OKOK。握ってやるから安心して寝ろ。」

もう一度亜衣に近づき、差し出された手を握ってやる。しばらく

したら、亜衣はすやすやと眠りについた。

その表情はとても幸せそうで、なんとというか、満たされた表情、
とでも言うべきかな？まあ、そんな感じの表情になっていた。

「どつやら、悪夢は見えないみたいだな。」

亜衣が寝てからも、俺は手を握り続けてやった。しばらくすると、
俺もまた、そのまま眠りに落ちてしまった。

「ん……あれ？」

気づけば、俺はベッドの中にいる。ちなみに、俺の部屋の、な。
しかし、手には何かを握っている感触がある。

まさか……

「ん……」

……

硬直時間、若干数分。

まあ待て、俺。状況を冷静にまとめろ、焦るんじゃないぞ、素数を数えて落ち着くんだ。1 3 5 7 9……おい俺、9は素数じゃないぞ！ホントに落ち着け！

「ふ、ふにゆ？え、あれ、浩介くん！え、なんで……」

うわあ、どうしよう！亜衣が起きちゃった！

「ま、待て、亜衣！落ち着け、あわてるんじゃないぞ、素数を数えて落ち着くんだ！」

「う、うん、わかった！1 3 5 7 9……あ、違う！9は素数じゃないよ！」

すごい、俺と全く同じあわて方だ。

「ま、まあとりあえず降りろ。話はそれからだ。」

「う、うん、わかった。」

とりあえずさっさとベッドから出ることに。ひとまず心を落ち着かせるための深呼吸。

すう〜、はあ〜。

気持ちを落ち着かせたところで、改めて本題へ。

「なんで俺ら二人が俺のベッドで寝てたんだ？」

「……さあ、わかんない。でも、手は握ったままだったみたいだよ？」

確かにさっき手は離していなかった。つまり、俺たちは自分の意思では移動していないはずだ。

……

俺の中でひとつの方程式が解けた。

「お・や・じ〜〜!!」

俺は自慢の足で一気に階段を降りていく。こんなことをする人間は一人しかいない！親父、その人のみだ！

「なに〜、浩介君？呼んだかな〜？へぶっ!!」

毎度おなじみ鉄拳制裁。こいつは、一体いつになったらまともな人間になってくれるんだろう？もはやここまできたらまともな人間には戻れないか。

「お前、飯抜き。」

それだけ言い放ち、俺は二階へ戻っていった。

「……36・2か。かなり下がったな、俺。」

再び一階に降りて熱を測ってみると、もうほとんど熱も収まっている。やるな、俺の体の超回復力。

「亜衣におかゆを作って、俺はトーストにでもするかな。親父は、今日捨てる予定だった魚の骨でも食わすかな。」

それぞれの朝食を作って、全員が食事を終えた後、俺は亜衣の熱を測った。

「よし、計れたな。えっと、38・9か。今日は学校休まないとな。」

「……学園に行っちゃダメ？」

「当然だろ。今日は休み。」

それだけ言っつて、俺はもう一度1階に降りた。亜衣が休むこと、学園に連絡しないとな。

「はい。そういうことで、広瀬亜衣は今日欠席します。」

へえ、珍しい。親父が学園に連絡入れてくれるみたいだ。

「はい、亜衣ちゃんの欠席については連絡し終わったよ。さあ、浩介君は学園に行つてらっしゃい。」

「ああ、そのことなんだがよ、俺も休ませてもらえねえか？」

「え？なんで？」

わかりきったことを聞くな、親父。亜衣が心配だからに決まってるんだろ？

「親父も仕事に行かなきゃいけないんだから、誰か一人残つて看病してやらないと……」

親父なら別にいい、といつてくれると思つていた。しかし、その予想はたやすく裏切られた。

「それはダメだね。浩介君、学生は勉強が仕事なんだ。それをサボるわけにはいかないよ。」

「!?!?……お前、そんなこと今はどうだっけいいだろ? 39 近く熱があるんだぞ、あいつ。」

必死になって親父に意見する。しかし、親父はその意見を聞こうともしない。親父は、俺のポケットに手をつ突っ込んだ。

「家に入れないように、これは預かっておくよ。」

ポケットから、俺のピッキングセットが取られた。そのまま親父は俺をかばんと一緒に家の外へ放り出した。

「野郎……ふざけやがって!!」

ガン、と車を思い切り決ってやった。なんだ、朝飯を昨日の魚の背骨にしたことをそんなに怒ってるのか!?

こんなことをしていても気が晴れるわけではない、だがどうしても当たらずにいらなかった。

「くそっ! ピッキングセットは取り上げられたし、どうするかな……」

……ん?」

2階の俺の部屋の窓が空いている。その窓の横には、水を通すための細いパイプがある。

「これだ!……よし!」

パイプに足をかけ、それをよじ登っていく。昔、学校の屋上までこれと同じ方法で上っていたのを思い出した。

「よし、到着!」

静かに自分の部屋に入り込むと、そのまま窓を閉める。親父が家を出るのを見計らって部屋を出ようとした。その前に、俺は机の上にある紙に視線が言った。

「……なんだ、あれ？……ん？」

手紙だった。中身にはこうかかれてあった、「親の言う事聞かないと、あとでお仕置きがあるよ。それでもいいなら、休みなさい。」と。

まったく、あいつの考えることはよくわからない。

「まあ、後でお仕置き覚悟しとくか。」

紙をゴミ箱に捨て、亜衣の部屋に入った。

「え、あれ、浩介くん！？学園、行かなくていいの？」

「お前の看病のほうが大事だ。お前、ほっとくとなにしでかすかわかんないから。」

とにかく、亜衣を寝かし、再び熱冷まシートを張り替え、氷枕を新しいものにかえる。人の看病って、案外大変だった。

しかし、今日一日をその看病に使ってみると、どこことなく気分がよくなった。人のために何かをする、それは自分の利益になる、ならないだけではあらわせない、何か大切なものをえることができるようだ。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1572e/>

非日常同居生活

2010年10月10日01時53分発行